

“未来を拓くたくましい安曇野の子ども”を目指す

安曇野市立小・中学校の将来構想

(案)

令和 3 年 12 月

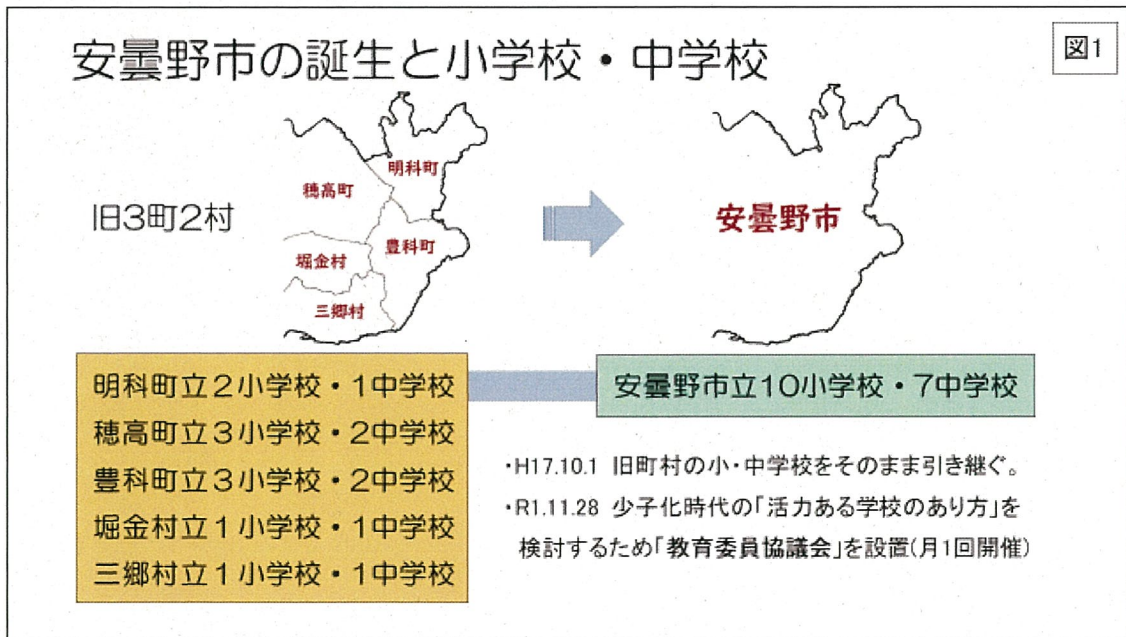
安曇野市教育委員会

はじめに

安曇野市は、平成 17 年 10 月 1 日に旧 5 町村が合併して誕生しました。これに伴い、旧町村立小・中学校は、そのまま安曇野市立小・中学校へと移管され、安曇野市教育委員会は、現在まで 10 校の小学校と 7 校の中学校を所管し義務教育を担ってきました。(図 1)

この間の安曇野市の人口の推移や少子化の状況に対して、今後の活力ある学校はどうあったらよいかについて検討する必要性が高まり、令和元年 11 月、教育委員会内に「教育委員協議会」を設置しました。*これまで、月 1 回のペースで令和 3 年 1 月まで計 15 回の協議を重ねるとともに、各種団体などと意見交換の場を設け、様々なご意見やご提言をいただき、「未来を拓くたくましい安曇野の子ども」を目指す安曇野市立小・中学校の将来構想(案)」としてまとめました。

今後、安曇野市立小・中学校の学びの環境をより活力あるものにしていくために、夢と期待を込めたこの将来構想を受けて、具体的な行動計画の策定につなげていきたいと考えています。



*教育委員協議会は、教育委員会制度において、月 1～2 回の定例会のほかに開催できる臨時会や非公式の協議会のひとつとして、令和元年 9 月定例会で設置が承認されたもの

目次

1	安曇野教育を支えてきたもの	… 1
	(1) 教育尊重の精神や気風	… 1
	(2) 求め続ける教師	… 1
2	安曇野市内の教育施設	… 2
3	子どもを取り巻く環境の変化と課題	… 3
	(1) 社会的環境の変化に伴う子どもや学校の課題	… 3
	(2) 時代の変化に対応した教育環境整備	… 3
4	安曇野市の「教育の方針」	… 4
	(1) 安曇野市教育大綱	… 4
	(2) 安曇野市の目指す子ども像	… 5
	(3) 学校教育グランドデザイン	… 5
5	安曇野市の人口と児童生徒数	… 6
	(1) 安曇野市の人口の推移	… 6
	(2) 安曇野市の児童生徒数の推移（合併時から現在まで）	… 7
	(3) 今後の小・中学校の児童生徒数の予測と特徴	… 8
	(4) 地域ごとにみた学校別児童生徒数の予測	… 9
6	安曇野市の未来を担う世代の状況	… 11
	(1) 安曇野市の年齢別人口（人口ピラミッド）からみた課題	… 11
	(2) 中学校卒業者の進路状況	… 12
7	市民が期待する小・中学校の姿と市が目指す活力ある学校の姿	… 12
	(1) 「市民アンケート調査」からみた期待する小・中学校	… 12
	(2) 市が目指す活力ある学校の姿	… 13
8	安曇野市の教育・学校の将来像	… 14
9	「活力ある学校づくり」を目指した具体的方策	… 15
	(1) コミュニティスクールの活性化	… 15
	(2) 新たな学校運営協議会の主な役割と協議会運営のポイント	… 18
	(3) 新しいコミュニティ・スクールへの移行で変わること・期待されること	… 18
	(4) 小中一貫教育の導入	… 19
	(5) 安曇野市の目指す小中一貫教育の枠組み	… 19
	(6) 安曇野市小中一貫教育に向けた市指定校研究	… 19
	(7) 「安曇野の時間」(仮称)の創設	… 21
10	これからの安曇野市の教育・学校のあり方について（まとめ）	… 22
	【資料編】用語解説など・教育委員協議会名簿	… 23

注. 本文中の「※」を付した用語については、資料編で用語解説を記載しています。

1 安曇野教育を支えてきたもの

(1) 教育尊重の精神や気風

安曇野における教育の源流を遡ると、江戸時代末期この地に、全国的にみても数多くの寺子屋や特色ある私塾が開設されたことから始まります。その後、明治5年8月に学制が公布されると、今の小・中学校のルーツに当たる「学校」が次々に誕生し、その就学率は群を抜いて高かったことが知られています。そして、志を高くもって学びに励んだ人々の中から、日本や世界に誇る様々な分野の先覚者が多数輩出しています。(図2)

また、この地域は、“教育尊重の精神や気風・教育熱”が極めて高く、例えば、昭和15年に旧高家小学校跡に「西田幾多郎碑」(市の有形文化財)が建てられ、現在も地元の方々の手によって大切に守られているなど、教育・文化・芸術に関する伝統や行事が各地で継承されています。

安曇野教育を支えてきたもの

—教育尊重の精神や気風—

高い志を抱いて活躍した先人たち(敬称略)

- ・藤森寿平：南安曇郡の近代教育の先駆者
- ・松沢求策：自由民権運動のリーダー
- ・井口喜源治：研成義塾の創設者
- ・荻原碌山：彫刻家
- ・白井吉見：作家・文芸評論家・教育者
- ・田淵行男：昆虫学者・山岳写真家
- ・青木祥二郎：能楽師
- ・高橋節郎：漆芸家・文化勲章受章者
- ・飯沼正明：神風号パイロット
- ・熊井 啓：社会派映画監督 ほか多数



無事於心無心於事
物となつて考へ物となつて行ふ

旧高家小学校跡に立つ
西田幾多郎碑
—市有形文化財—

図2

(2) 求め続ける教師

安曇野の学校に奉職する教師の多くは、「教育の真なるもの、教師のあるべき姿を自らに問い続け、求め続ける姿勢」をもって、南安曇教育文化会館を拠点に、研修や調査研究活動を自主的に行い、自身の教師力の向上に努めてきました。また、安曇野ゆかりの先達の業績を顕彰し、伝え続ける伝統を受け継いでいます。(図3)

安曇野教育を支えてきたもの —求め続ける教師—

図3

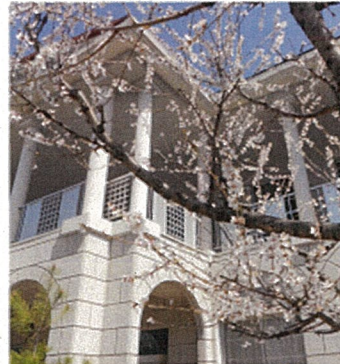
安曇野ゆかりの先達から学ぶ伝統

- ・南安曇教育会初代会長 岡村千馬太先生
- ・教育哲学者 木村素衛先生
- ・哲学者 務台理作先生 ほか

教育力を高める研修と調査研究活動

地域や保護者とともに取り組む活動

- ・安曇野の子どもを語る会



安曇野教育の拠点
南安曇教育文化会館

2 安曇野市内の教育施設

安曇野市には、認定こども園 20 園（公立 18 園、私立 2 園）、保育園 1 園（私立）、地域型保育事業所 8 園（家庭的保育：私立 1 園、小規模保育：私立 6 園、事業所内保育：私立 1 園）、幼稚園 1 園（公立）、認可外私立 6 園があります。令和 3 年 5 月 1 日現在の在籍人数は、2,693 人です。

また、市立小学校 10 校、市立中学校 7 校、県立高等学校が 4 校あります。令和 3 年 5 月 1 日現在、10 小学校に 4,744 人、7 中学校に 2,507 人、4 高等学校に 1,555 人が在籍しています。（図 4）

市内の保育・教育施設

図4

(R3.4)

就学前	認定こども園	公立18園、私立2園
	保育園	私立1園
	地域型保育事業所	家庭的保育(私立1園)、小規模保育(私立6園)、事業所内保育(私立1園)
	幼稚園	公立1園
	認可外	私立6園 公立19園、私立16園
小学校	豊科地域	豊科南小学校、豊科北小学校、豊科東小学校
	穂高地域	穂高南小学校、穂高北小学校、穂高西小学校
	三郷地域	三郷小学校
	堀金地域	堀金小学校
	明科地域	明南小学校、明北小学校 公立10校
中学校	豊科地域	豊科南中学校、豊科北中学校
	穂高地域	穂高東中学校、穂高西中学校
	三郷地域	三郷中学校
	堀金地域	堀金中学校
	明科地域	明科中学校 公立7校
高校	県立	明科高校、豊科高校、南安曇農業高校、穂高商業高校 公立4校

3 子どもを取り巻く環境の変化と課題

(1) 社会的環境の変化に伴う子どもや学校の課題

児童生徒や学校の現状を分析し、課題を3つに集約しました。(図5)

① 学校や子どもたちを取り巻く環境の複雑化、多様化

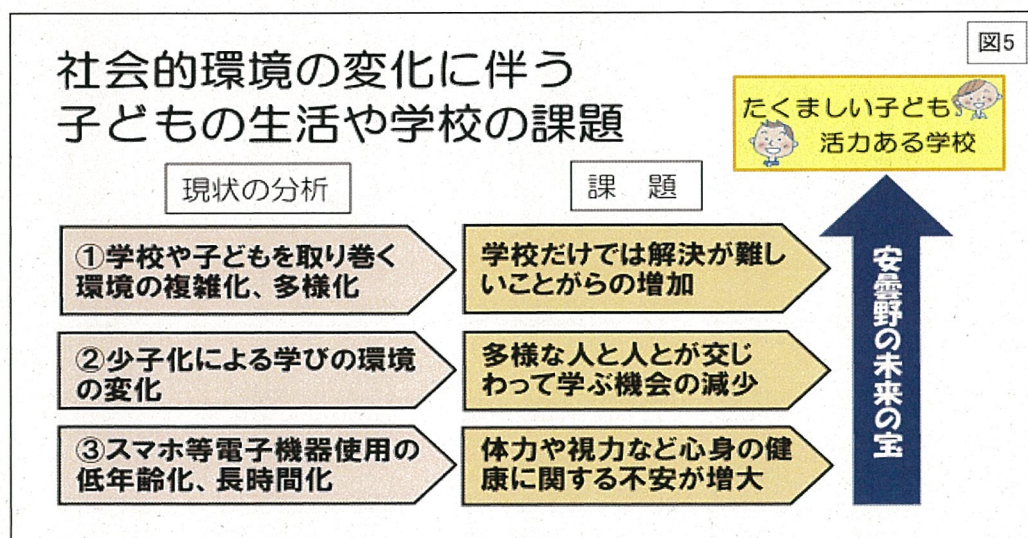
学校や子どもたちを取り巻く環境や状況が常に激しく変化し、価値観等の多様化もあって、学校だけでは解決が難しいことがらが多数あること。

② 少子化による学びの環境の変化

少子化による学級減やひとクラスの人数減により、多様な考えや経験をもつ人と人が交わって学ぶ機会が次第に少なくなっていること。

③ スマホ等電子機器使用の低年齢化、長時間化

児童生徒の生活スタイルや生活習慣の変化等により視力、体力、コミュニケーション力等の心身の健康に対する不安が増大してきたこと。



(2) 時代の変化に対応した教育環境整備(図6)

① ICT環境の整備

安曇野市では、ICT環境の整備を計画的に進め、電子黒板を平成29年度に全中学校7校のすべての普通教室に、令和2年度に全小学校10校のすべての普通教室に設置しました。

また、国のGIGAスクール構想を受け、全小・中学校のネットワーク環境整備と児童生徒への1人1台の学習用端末購入を令和3年5月までに完了しました。

② エアコンの整備

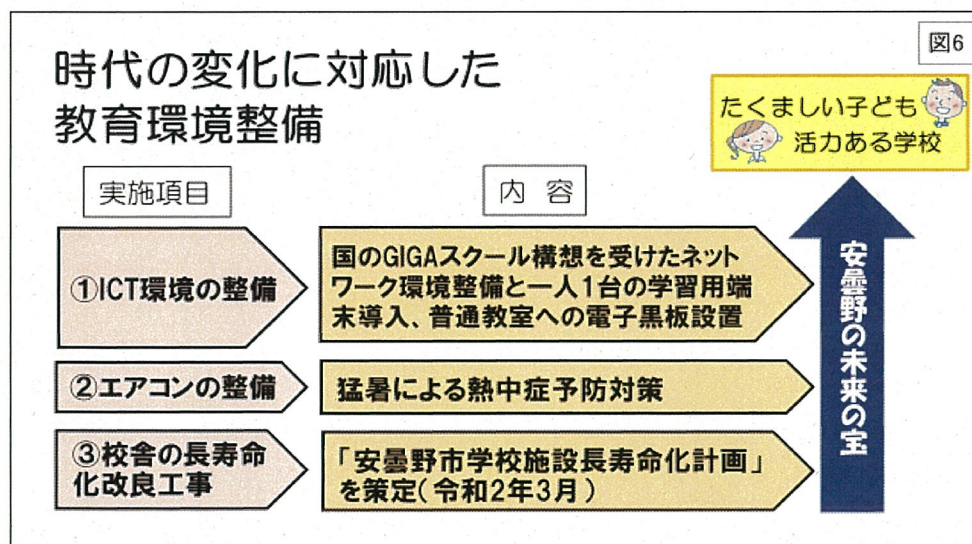
平成30年度の猛暑を受け、エアコンを全小・中学校の普通教室に令和2年度末までに設置しました。

③ 校舎の長寿命化改良工事

安曇野市の学校施設は、公共施設の約4割を占め、その中の建築後40年以上経過した校舎の保有面積が3割を占めるなど、老朽化が深刻です。

また、建築年が合併前の旧町村においてほぼ同時期であるため更新が集中する問題があります。

そこで、小・中学校の校舎の劣化状況を調査し、今後の計画的整備に資するための資料として「安曇野市学校施設長寿命化計画（個別計画）」を策定しました（令和2年3月）。今後、財政状況や児童生徒数の推移を踏まえつつ、学校規模の適正配置を見据えながら実施計画等に反映させていく予定です。



4 安曇野市の「教育の方針」

(1) 安曇野市教育大綱

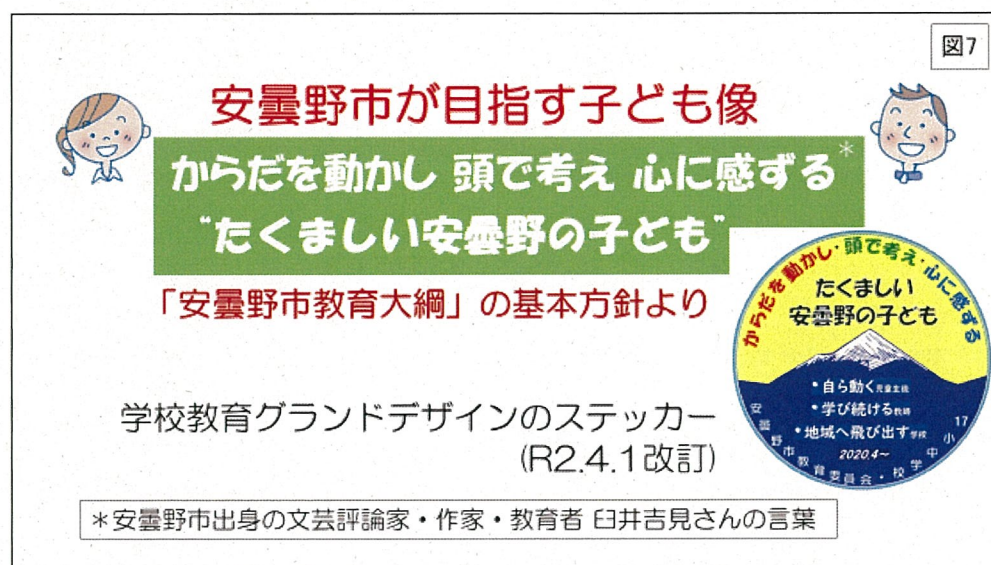
安曇野市は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律」の施行（平成27年4月1日）に伴い、総合教育会議の議論を経て「安曇野市教育大綱」を策定しました（平成27年10月）。そして、平成30年12月に開かれた総合教育会議において、期間を令和5年3月31日までとする新たな「安曇野市

教育大綱（改訂版）」を策定しました。（資料編 P28 参照）

この中で、平成 27 年度から掲げてきた「たくましい安曇野の子ども」の育成を基本方針の第 1 に掲げ、その旗印としてステッカーのリニューアルも行いました。

(2) 安曇野市の目指す子ども像

安曇野市が目指す子ども像は「からだを動かし・頭で考え・心に感ずる“たくましい安曇野の子ども”」です。この「からだを動かし・頭で考え・心に感ずる」のフレーズは、安曇野市堀金出身の文芸評論家・作家・教育者の臼井吉見さんが昭和 42 年 3 月に中学生に行った講演「中学生諸君にのぞむ」の中で語った言葉から引用したものです。「からだ・頭・心」のバランスの取れた具体的な目指す子どもの姿は、50 年以上前と今を比べても決して色あせることなく、これから求めていきたい安曇野の子ども像を具体的にイメージできるものです。（図 7）



(3) 学校教育グランドデザイン

「令和 3 年度学校教育グランドデザイン」では、目指す具体的な児童生徒・教職員・学校の姿として、「自ら動く児童生徒」「学び続ける教師」「地域へ飛び出す一地域との連携を強める学校」の 3 点を掲げました。次に、「市内全小中学校で重点的に取り組む内容」として、課題や目標 7 項目を掲げました。これらは、前年度までの各学校の取り組みの成果と課題を踏まえ市校長会とも協議して決めだしたものです。また、「市研究指定校」を明記し、全 17 小中学校が市の目指す教育方針を共有しながら取り組んでいます。（図 8）

安曇野市学校教育グランドデザイン

図8

—令和3年度版—



安曇野市が目指す子ども像

願う具体的な児童生徒、教師、学校の姿

市内全校で重点的に取り組む内容

市研究指定校

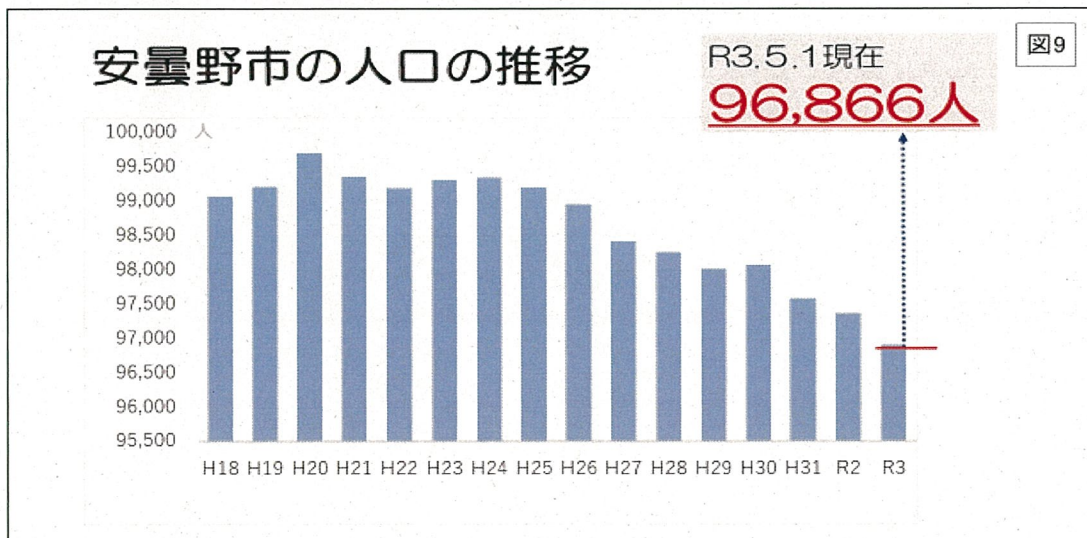
今後大事に取り組む施策等

※拡大版は資料編P 29 参照

5 安曇野市の人口と児童生徒数

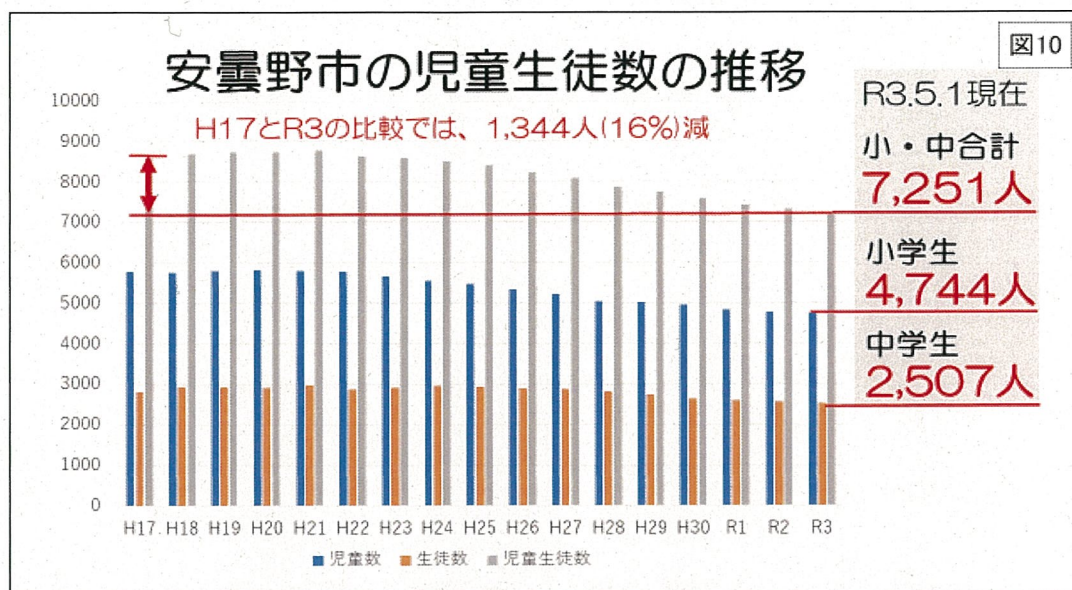
(1) 安曇野市の人口の推移

安曇野市の人口は、合併後しばらくして減少に転じ、減少傾向が続いており、令和3年5月1日現在 96,866 人となっています。(図9)



(2) 安曇野市の児童生徒数の推移 (合併時から現在まで)

安曇野市の児童生徒数は、令和3年5月1日現在、小学校児童数は4,744人、中学校生徒数2,507人で、合計7,251人です。合併直前の平成17年5月1日現在の児童生徒数(8,595人)と比較すると16年間に1,344人の減少(16%減)になります。(図10)



昨年と本年度を比べると、通常学級在籍児童生徒は128人減ですが、特別支援学級在籍児童生徒は48人増となっています。これを、学級数で見ると、特別支援学級の学級数が増加傾向にあることから、全体の学級数の減少は小さい状況です。

(図11) 【参考】学級数について …資料編 P27 参照

現在の児童生徒数・学級数 (R3.5.1現在) (図11)

	児童生徒数			学級数		
	通常学級	特別支援学級	計	通常学級	特別支援学級	計
小学校	4,420	324	4,744	155	50	205
	-60	27	-33	-3	1	-2
中学校	2,327	180	2,507	76	29	105
	-68	21	-47	-2	1	-1
計	6,747	504	7,251	231	79	310
	-128	48	-80	-5	2	-3

下段の数字は、R2.5.1との比較

(3) 今後の小・中学校の児童生徒数の予測と特徴

次に、今後の小・中学校別の児童生徒数を、出生数をもとに推測し、令和2年度と令和7年度の児童生徒数の今後5年間の増減率をみると、小学校でその率が高いのは、豊科東小（-35%）、堀金小（-28%）、穂高北小（-26%）、明北小（-24%）、明南小（-19%）となっています。

中学校では、堀金中（-24%）、明科中（-13%）となっています。全体で、521人減少する見込みです。（図12、図13）

図12

小学校別児童数のR7推計値とR2との比較

	R2(人)	R7*(人)	R7-R2(人)	増減率(%)
豊科南小	681	695	14	2
豊科北小	548	538	-10	-2
豊科東小	175	114	-61	-35
穂高南小	574	596	22	4
穂高北小	674	498	-176	-26
穂高西小	393	437	44	11
三郷小	928	873	-55	-6
堀金小	482	349	-133	-28
明南小	217	175	-42	-19
明北小	105	80	-25	-24
計	4777	4355	-422	-9

*出生数を基にした推計値 ○ 減少が著しい学校

図13

中学校別児童数のR7推計値とR2との比較

	R2(人)	R7*(人)	R7-R2(人)	増減率(%)
豊科南中	311	350	39	13
豊科北中	355	370	15	4
穂高東中	478	455	-23	-5
穂高西中	410	383	-27	-7
三郷中	507	503	-4	-1
堀金中	304	230	-74	-24
明科中	189	164	-25	-13
計	2554	2455	-99	-4
合計	7331	6810	-521	-7

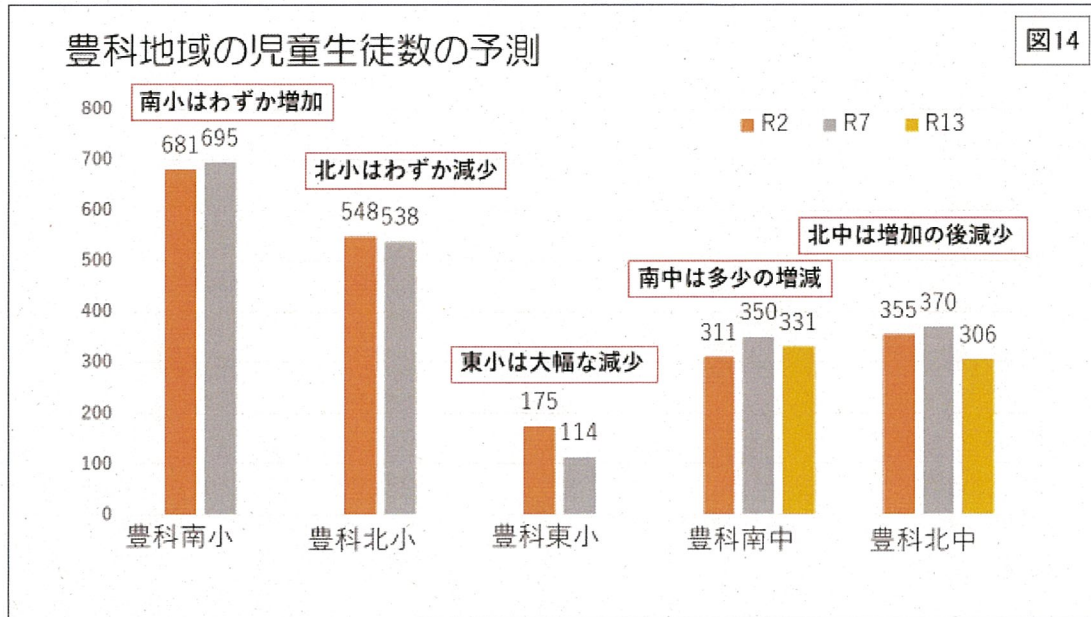
*出生数を基にした推計値 ○ 減少が著しい学校

令和7年には、令和2年と比べて市内小中学校全体で521人減少することが予測される。

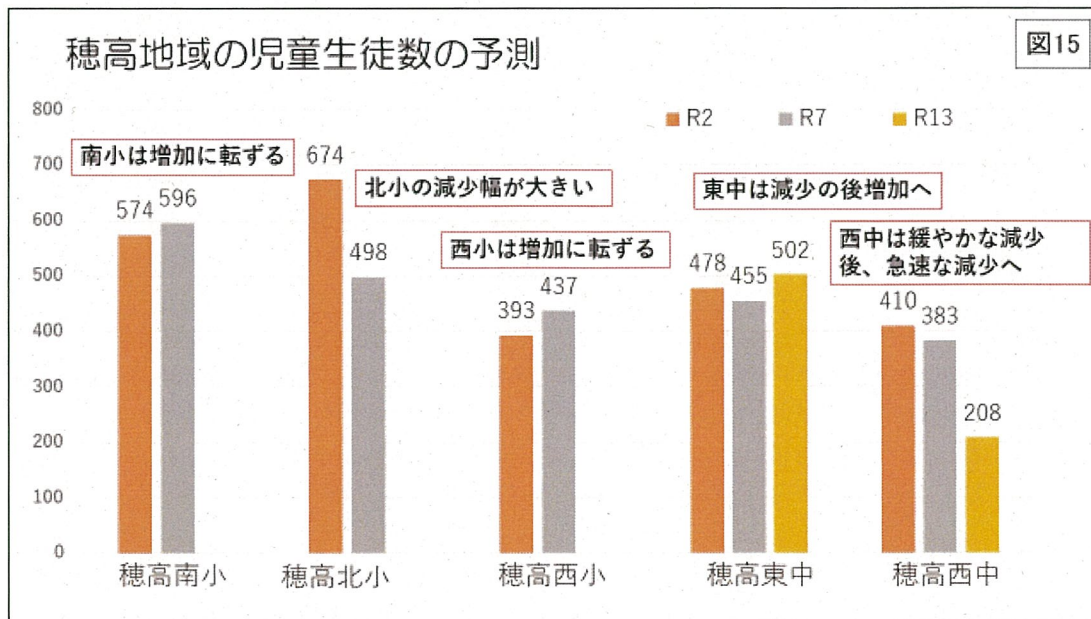
(4) 地域ごとにみた学校別児童生徒数の予測

〔豊科地域〕豊科南小はわずか増加、豊科北小はわずか減少、豊科東小は大幅な減少となる見込みです。豊科南中と豊科北中は5年後まで増加した後、減少していくと思われます。その減少幅は、豊科北中が豊科南中よりも大きいと見込まれます。

(図 14)

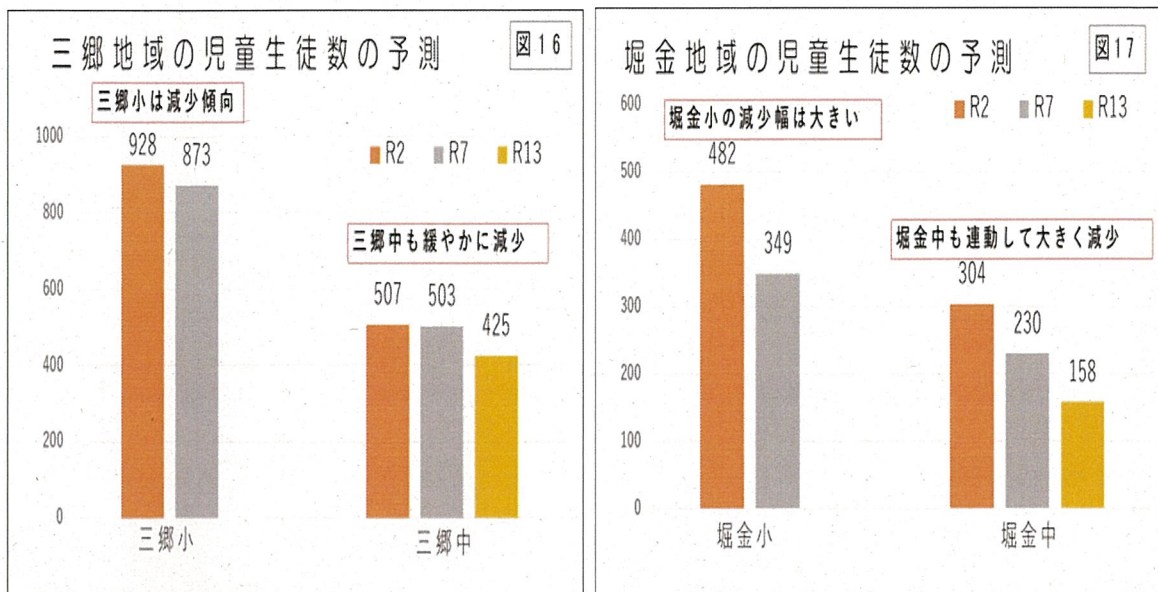


〔穂高地域〕穂高南小と穂高西小は、増加に転ずる一方、穂高北小は大幅に減少することが見込まれます。穂高東中は減少の後、増加へ、穂高西中は緩やかな減少後、急速に減少するものと思われます。(図 15)



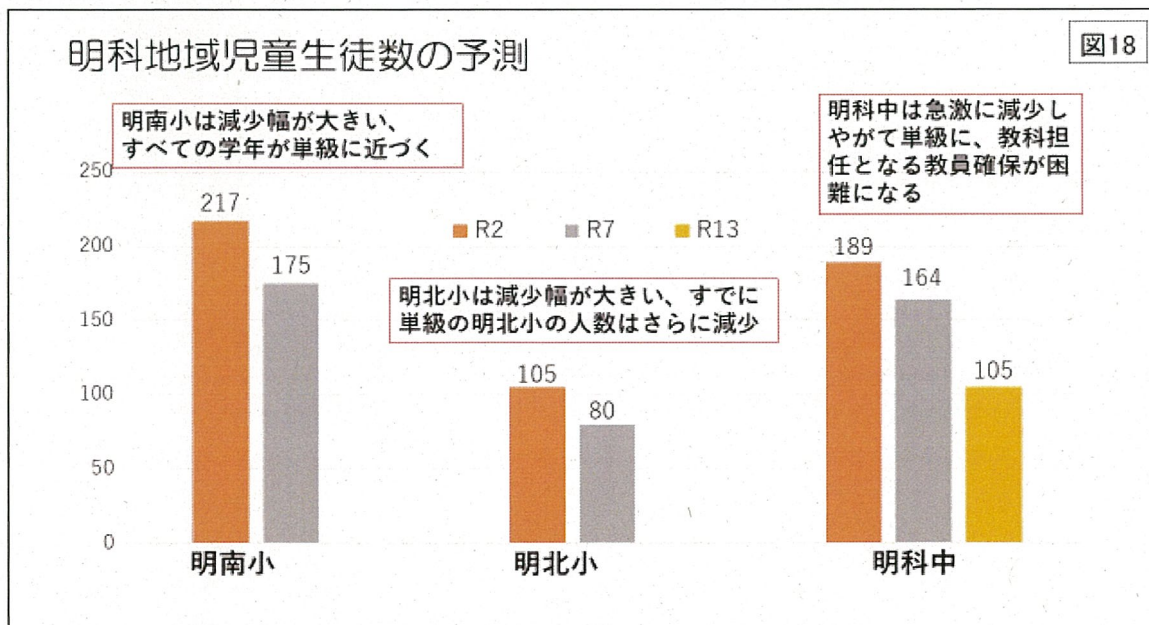
〔三郷地域〕 三郷小と三郷中は緩やかに減少していくものと思われます。(図 16)

〔堀金地域〕 堀金小の減少幅は大きく、堀金中は、堀金小に連動する形で大きく減少するものと思われます。(図 17)



〔明科地域〕 明南小、明北小ともに減少幅が大きく、明南小はすべての学年が単級に近づく見込みです。すでに単級の明北小のクラスの人数はさらに減少する予測です。明科中は急激に減少しやがて単級になっていきます。そうすると、すべての教科で教科担任が学習指導を行うための教員確保が困難になるものと思われます。

(図 18)



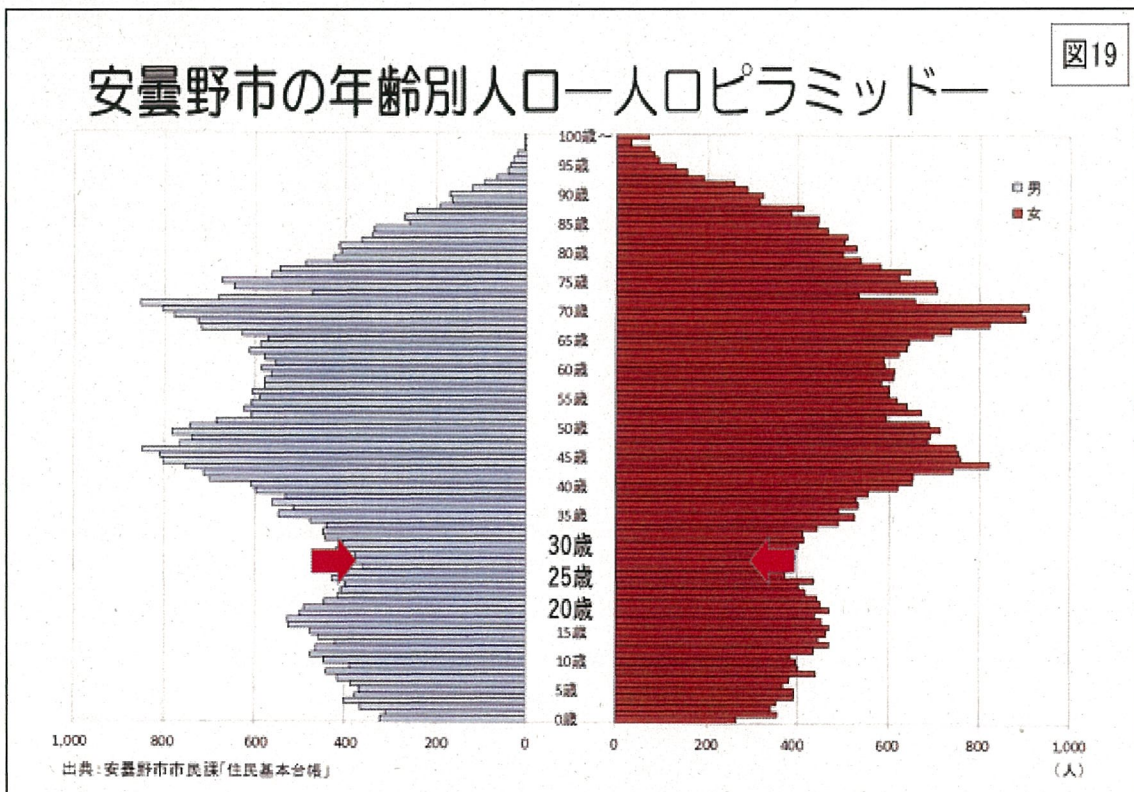
6 安曇野市の未来を担う世代の状況

(1) 安曇野市の年齢別人口（人口ピラミッド）からみた課題（図19）

安曇野市の年齢別人口＝人口ピラミッドをみると、男女ともに20歳代半ばで大幅に人口が少なくなっていることが特徴です。この背景には、高校卒業後の進学、就職等で市外への転出が多いことがあげられますが、実際には、大学を卒業または就職する時点で住民票を移す結果、一気に人口が減少するのではないかと推測されます。その後は、4～5年後から徐々に安曇野に戻ってくる傾向が反映されているものと推測します。

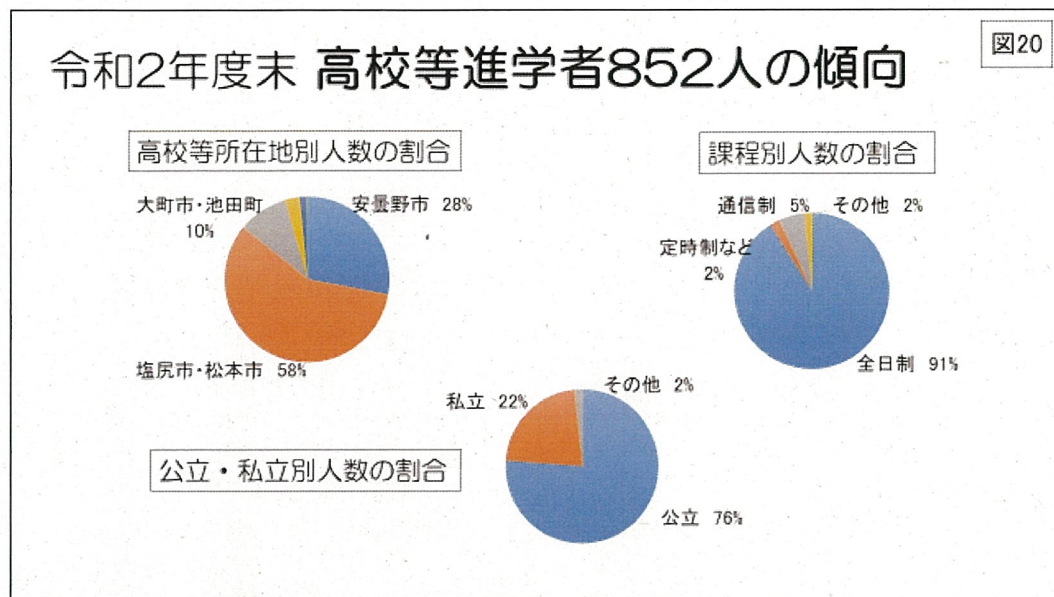
また、14歳以下の人口減少は今後も続く見込みのため、市としても出生数を伸ばす対策を講じていますが、仮にこの状況が続けば、現在の学校数を維持することが困難な時期が早晚到来することが懸念されます。

今後、安曇野市が持続可能な活力ある自治体として生き残るためには、小中学校や高校の時代に安曇野のよさ、地域の魅力、ふるさとを心に刻んでもらえるか、安曇野地域にあるさまざまな分野の優良企業や働く場があることを認識してもらえるかなどの小中高を通じたキャリア教育についても連携して取り組む必要があるととらえています。



(2) 中学校卒業者の進路状況

令和2年度末の高校進学者852人中、安曇野市内の高校等へは27.9%、松本市、塩尻市の高校等へは57.7%、大町市・池田町の高校へは9.6%となっています。また、公立が76.2%、私立が22.1%です。(図20)



*図20の「大町市・池田町」には、池田町にある長野県安曇養護学校高等部への進学者5名が含まれています。同校高等部には平成22年4月に募集定員8名の「あづみ野分教室」が、県南安曇農業高校内に開室され、令和3年に高等部へ進学した5名中2名が通学しています。「地域との関係を深めた作業学習、日常生活に必要なコミュニケーション能力を高める学習、就労に向けての力をつける学習」に取り組む特色ある教育を行っています。

7 市民が期待する小・中学校の姿と市が目指す活力ある学校の姿

(1) 「市民アンケート調査」からみた期待する小・中学校(図21)

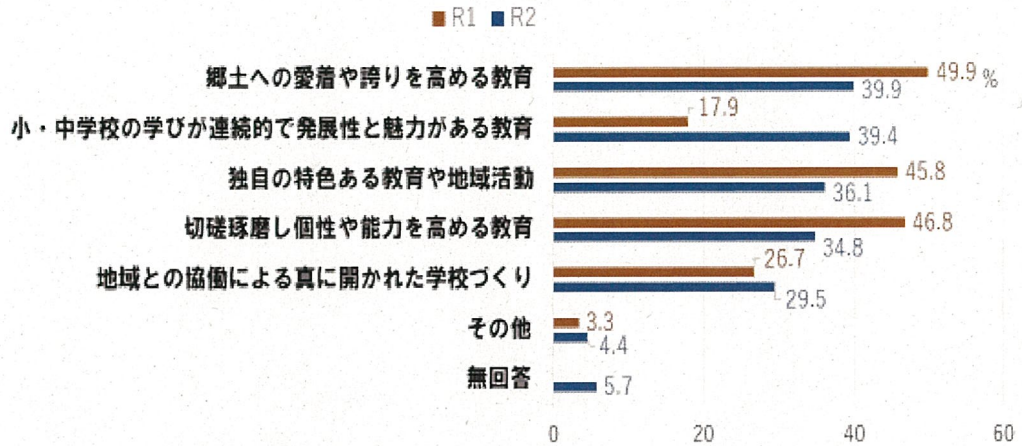
安曇野市政策部政策経営課が実施した「市政全般に関する市民意識調査」の「学び合い人と文化を育むまち」の教育に関する質問項目として、令和元年度調査では「あなたが期待するこれからの安曇野市の小中学校の姿はどれですか。」、令和2年度調査では「あなたは、特色ある学校づくりのため、市では、どのようなことに力を入れるべきだと思いますか」(複数回答)を尋ねました。

その結果、市民が期待する安曇野市の小中学校の姿は、「小・中学校の学びが連続的で発展性と魅力がある教育」に期待が高まっている一方で、「地域とともにつくっていく真に開かれた学校」に一層力を入れる必要があったことがわかりました。

図21

期待する小・中学校の教育

—令和元年度・令和2年度「市民意識調査」から



市政全般に関する市民意識調査(市内在住の18歳以上2000人、無作為抽出、質問紙調査、複数回答)
 令和元年度: 令和2年2~4月実施(有効回答者数317件) 令和2年度: 令和3年2~4月実施(有効回答者数343件)

(2) 市が目指す活力ある学校の姿

教育委員協議会では、アンケート結果等をもとに、「安曇野市が目指す活力ある学校」とはどのような学校かについて協議し、期待する「これからの学校」、目指す「活力ある学校」として、次の5つにまとめました。(図22)

図22

期待する「これからの学校」の姿

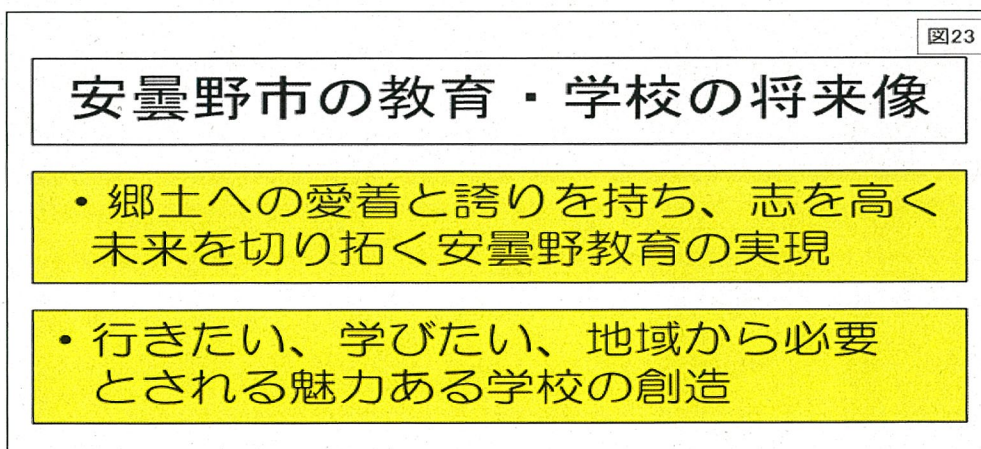
- ① 独自の特色ある教育や地域活動を活発に行う学校
- ② 地域との協働による真に開かれた学校
- ③ 切磋琢磨し個性や能力を高める学校
- ④ 郷土への愛着や誇りを高める学校
- ⑤ 小・中の学びが連続的で発展性と魅力がある学校

目指す「活力ある学校」の姿

- ① 独自の特色ある教育や地域活動を活発に行う学校
地域住民、児童生徒や教職員の思いが大切にされ、創意工夫を凝らした独自の特色ある教育活動を展開する学校
- ② 地域との協働による真に開かれた学校
保護者や地域住民の意見を学校運営に反映させたり、学校の様々な課題解決に地域住民が積極的に参加したりして、地域とともにつくっていく真に開かれた学校
- ③ 切磋琢磨し個性や能力を高める学校
一定数の児童生徒がともに生活する学校で、多様な考えをもつ人間が触れ合い学び合って、切磋琢磨しながら個性や能力を高めていく学校
- ④ 郷土への愛着や誇りを高める学校
地域の豊かな自然・歴史・文化・地域産業資源に着目した体験的な活動を多く取り入れ、郷土への愛着や誇りを育む学校
- ⑤ 小・中学校の学びが連続的で発展性と魅力がある学校
現在ある小学校と中学校を組み合わせ一貫教育を行う「小中一貫教育」の導入、小学校から中学校までの9年間の義務教育を一貫して一体的に行う小中一貫型小学校・中学校や義務教育学校の設置など、学校（区）ごとに理念や方針を明確にした魅力ある学校

8 安曇野市の教育・学校の将来像

さらに、これからの安曇野市が目指す教育・学校の将来像として、大きく2つの目標を設定しました。(図 23)

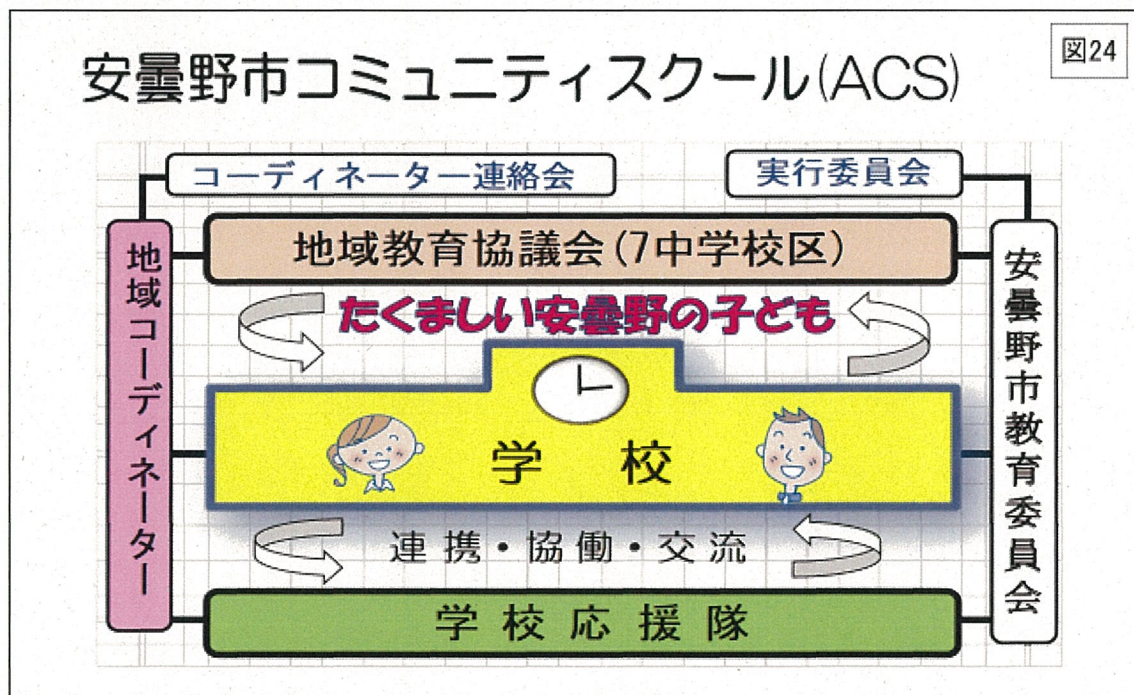


9 「活力ある学校づくり」を目指した具体的方策

2つの教育・学校の将来像を目指して、5つの学校を掲げ、安曇野市立小・中学校の学びの環境をよりよいものにしていくために、コミュニティスクールの活性化、小中一貫教育の導入、「安曇野の時間」の創出の3つの柱を立てました。

(1) コミュニティスクールの活性化

コミュニティスクールとは、「保護者や地域住民の協力と支援で、地域とともにつくる学校づくりを行うためのしくみ」のことです。安曇野市では、平成21年度から安曇野市学校支援地域本部事業を取り入れ、平成26年度からは安曇野市スクールサポート事業、平成29年度からは、県教育委員会が推奨している信州型コミュニティスクールとして、「安曇野市コミュニティスクール(ACS)」の名称で充実を図ってきました。^{※5} (図24)



その結果、これまで大勢の地域の方々に支援をしていただき、児童生徒は、「社会で生き抜く力、ふるさと安曇野への愛着や誇り、学ぶ楽しさ」などを育てていただいています。また、地域の方々からは「やりがいや生きがいを感じる、かかわることが楽しい、子どもから元気をもろう」と嬉しい言葉をいただいています。一

方で、「学校に関心はあるが、どうやって協力したらよいかわからない、かかわり方がわからない」「経験や知識を子どもたちにもっと伝えたい」「敷居がまだまだ高い気がする」などの意見もいただいています。学校からは、「いつでも学校に来ていただけるような柔軟なしくみが欲しい」という声が寄せられました。(図 25)

ACS(安曇野市コミュニティスクール)の成果と課題

図25

①
裁縫学習

②
総合(太鼓)

③
八面大王劇

④
クラブ活動(折り紙)

⑤
自主学習

〔児童生徒〕 ● “社会で生き抜く力、ふるさと安曇野への愛着や誇り、学ぶ楽しさ” が育っている

〔地域〕 ● “やりがいや生きがい” を感じる、かかわることが楽しい、子どもから元気をもらう

▲ 「学校に関心はあるが、どうやって協力したらよいかわからない、かかわり方がわからない」

「経験や知識を子どもたちにもっと伝えたい」「敷居がまだまだ高い気がする」

〔学校〕 ▲ 「いつでも学校に来ていただけるような柔軟なしくみが欲しい」

➡ 地域とともに、真に開かれた学校を目指す

そこで、現在の組織を見直し、保護者や地域住民の意見を学校運営に反映させ、学校の様々な課題解決に地域住民がもっと積極的に参加して、地域とともにつくっていく真に開かれた学校づくりを更に進めるため、新たに各学校ごとに学校運営協議会を導入した国型のコミュニティ・スクールへの移行を目指すことにしました。

国型のコミュニティ・スクールでは、これまでの学校と地域とのかかわり方が、連携から協働へとより密度の濃いものを目指すことになることから、これまでの安曇野市コミュニティスクールで用いてきた名称も、理念や考え方を反映したものにするため変更したいと考えています。(図 26、27)

- ・ 地域教育協議 ➡ 学校運営協議会
- ・ 学校応援隊 ➡ 地域学校協働本部 (仮称「ボランティア会」)
- ・ 地域コーディネーター ➡ 地域学校協働活動推進員

コミュニティスクールの活性化

学校運営協議会と地域学校協働活動による 安曇野市コミュニティスクールの構築

学校運営に保護者や地域住民の意見を反映し、学校の様々な課題解決に地域住民がより積極的に参加できる体制へ

➡ 国型コミュニティ・スクールへ

R4.4からの新体制*のイメージ



*「地方教育行政の組織及び運営に関する法律第47条の6」(H29.4施行)

(2) 新たな学校運営協議会の主な役割と協議会運営のポイント

各学校に設置される学校運営協議会の主な役割は3つあります。(図28)

図28

学校運営協議会の主な役割

- ①校長が作成する学校運営の基本方針を承認する。
- ②学校運営について、教育委員会または校長に意見を述べることができる。
- ③教職員の任用に関して、教育委員会規則に定める事項について教育委員会に意見を述べるができる。

なお、③については、ここでの任用に関する意見は、分限処分、懲戒処分、勤務条件等の決定にかかわる事項は含まれません。つまり、実現しようとする教育目標に沿った教職員の配置、教職員構成のあり方等を求めるものであり、目指す学校像、学校運営ビジョンを実現させるための意見ということになります。

次に、学校運営協議会の運営のポイントを3つに整理しました。

- ① 委員は、非常勤特別職の公務員として、教育委員会から任命されます。
- ② 委員は、合議体の協議会運営者として、当事者意識をもって臨むことが求められます。
- ③ 委員は、会議における司会・記録・事務等を率先して行うことにより、自立した運営を行うことが大切です。学校任せにせず、学校に負担をかけない運営体制を構築する必要があります。

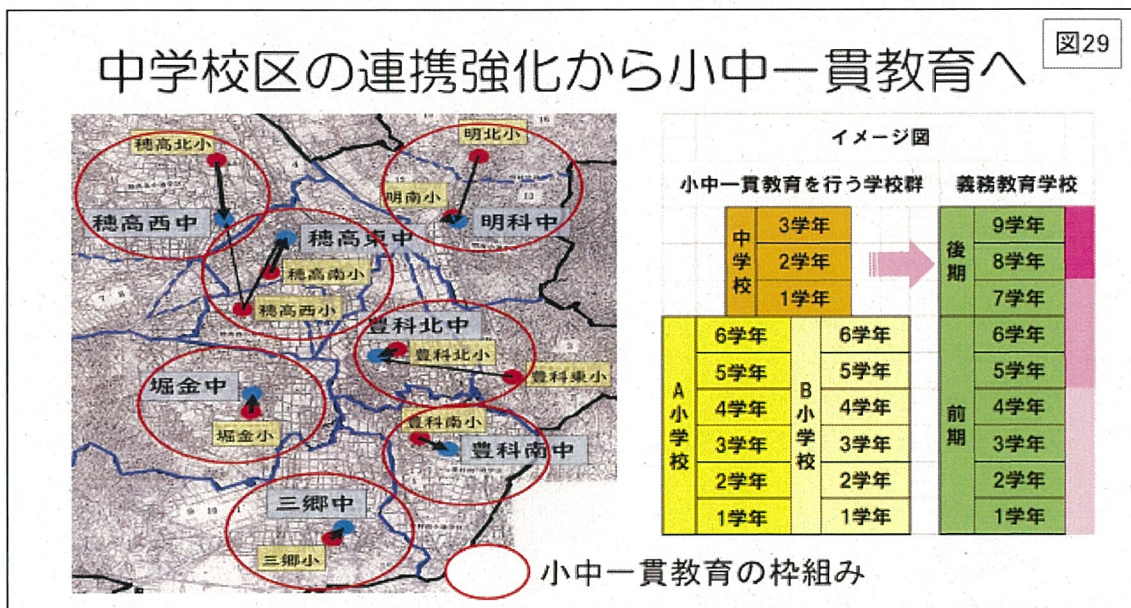
(3) 新しいコミュニティ・スクールへの移行で変わる事・期待されること

- ・各学校に学校運営協議会を設置することで、協議会の開催回数を増やすことができ、地域住民が学校の様々な課題により当事者意識を持って積極的に参加し、学校と地域と一緒に問題解決に当たることが期待できる。(真に開かれた学校)
- ・学校応援隊を組織化し、地域住民が運営するボランティア会とすることにより、学校の支援要請にスピーディーに応えることができる。(無償のボランティア活動)
- ・学校が地域コミュニティのよりどころ(拠点)となる。

(4) 小中一貫教育の導入

今後の日本の教育に求められることとして、松本大学山崎保寿教授は、教育委員協議会での講演会（令和2年2月18日）の中で、「これからの学校は、同一学区内の小・中学校が、学校教育目標や目指す子ども像を共有し、その達成に向けて小・中学校9年間を通じた系統的な教育活動（教育課程）を展開することにより、児童生徒のより豊かな学びと成長を実現していくことが大切だ」というお話をされました。これを受けて、安曇野市ではこれまでも行ってきた中学校区での小中連携教育をさらに発展させ、小中一貫教育の導入を目指すことにしました。

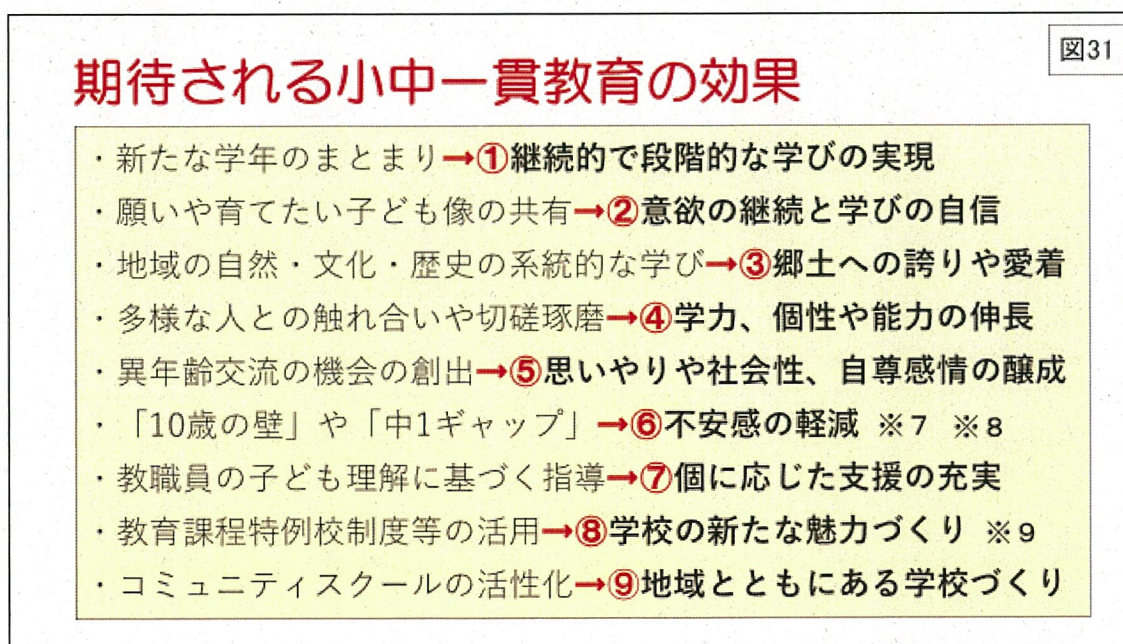
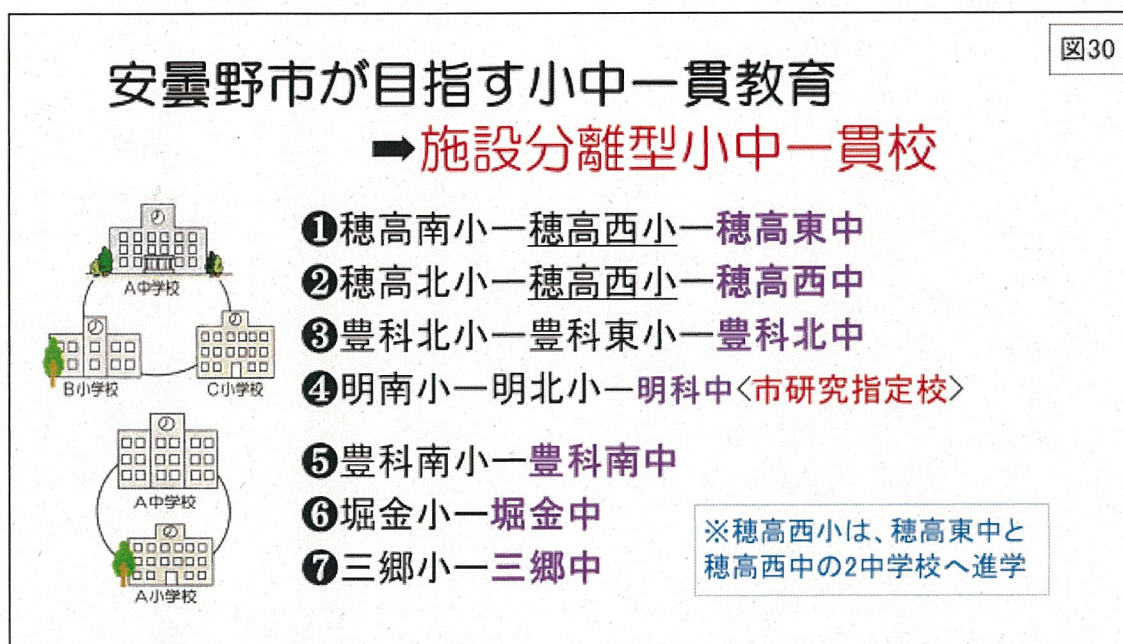
(5) 安曇野市の目指す小中一貫教育の枠組み (図 29)



(6) 安曇野市小中一貫教育に向けた市指定校研究 (図 30、図 31)

安曇野市教育委員会では、小中一貫教育の導入により、9年間の継続的で段階的な学びを実現させ、図 38 に掲げる期待される小中一貫教育の効果、たとえば「中1ギャップ」^{※8}の解消のほか、郷土への誇りや愛着の醸成、学力、個性や能力の伸長、小中の教職員が深い児童生徒理解に基づいた連携した指導や、学び合って指導力を向上させることなどについて具体的にその方法や課題等を明らかにしたいと考えました。そのために、指定校研究を実施することとし、令和2年度・3年度に、明北小学校、明南小学校、明科中学校を指定し、次のような内容で研究・実践を重ねています。

- ・同一学区の小・中学校が目指す「たくましい安曇野の子ども」の具体像
- ・児童生徒の実態や地域の特性を基にした「9年間を通じた教育課程」^{※9}
- ・教育課程特例校制度の活用^{※10}の検討（魅力ある特色ある学校の創出）
- ・小学校における教科担任制^{※10}の導入
- ・明科南・北認定こども園や明科高校との連携
- ・今後の新しいコミュニティ・スクールとの一体的な取り組み
- ・義務教育学校^{※6}創設の可能性 など



(7) 「安曇野の時間」(仮称)の創設

安曇野市立小・中学校では、ふるさとである安曇野市の自然や文化、歴史等について、地域に出かけて調査活動を行ったり、地域の方々から直接お話をお聞きしたりして、折に触れて体験的・探究的に学んできています。そして、そのことは、各小中学校の特色ある教育活動ともなっています。

これらを、小中一貫教育の中で改めて見直し、この地で教育を受ける児童生徒にとって、どのような内容をいつの時期(年齢)に学ぶことがよいのかを整理し体系化して、安曇野市に対するより深い理解のもと、ふるさとに対する愛着や誇り、自信につなげたいと願い、「安曇野の時間(仮称)」という形に位置づけたいと考えています。(図32)

さらに、県立高校では、「信州学」を中心にして主体的・対話的で深い学びの実現を目指しているので、市内4高校でも安曇野市の地域素材を教材として活用し、探究的な学びが実現するよう連携を強化していきたいと考えています。

なお、市教育委員会文化課では、安曇野市誌編纂事業を本格的にスタートさせますが、この中で「子ども版『安曇野市誌』」についても検討しています。将来的には、「安曇野の時間」のテキストとして活用できるよう連携を図ってまいります。

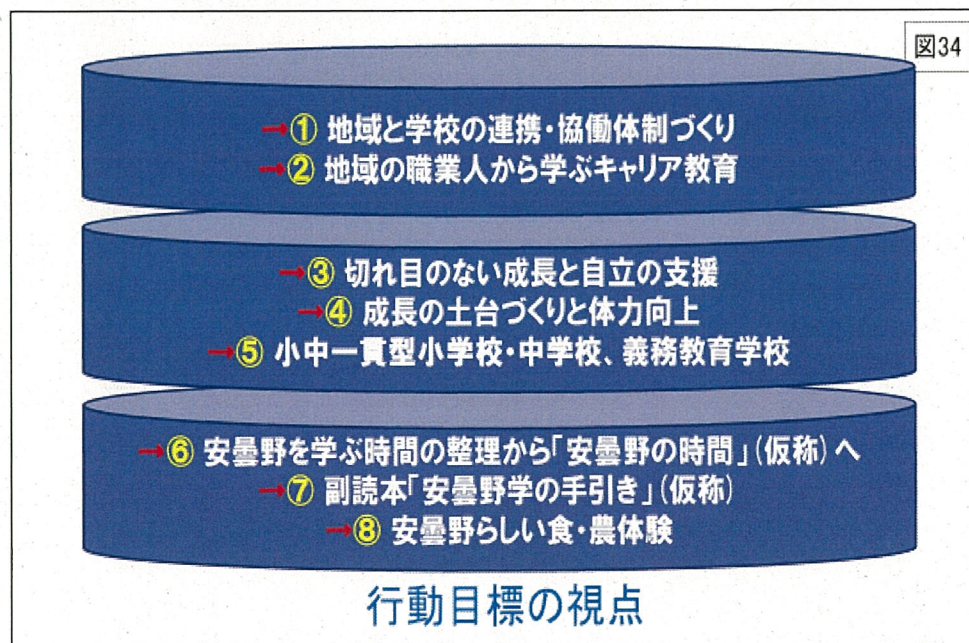
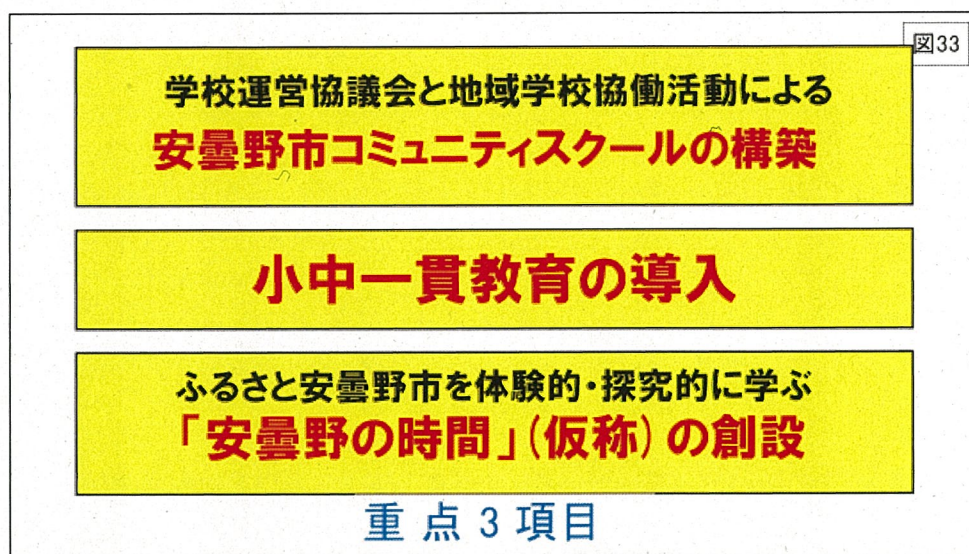
図32

「安曇野の時間(仮称)」とは

- 安曇野市の自然・文化・歴史・産業などについて、現在行っている学習活動を、小中一貫教育の視点で整理し、体系化したもの。
- 安曇野市に対するより深い理解のもと、ふるさとに対する愛着や誇り、自信につなげたい。

10 これからの安曇野市の教育・学校のあり方について（まとめ）

以上のように、重点3項目(図33)を掲げ、行動目標の視点(図34)について相互に関連づけながら、この地で学ぶすべての子どもたちが、持てる力を伸ばし、心豊かにたくましく生き抜く力を育む教育環境を、学校・地域とともにつくっていく基本的立場に立って、「郷土への愛着と誇りを持ち、志を高く未来を切り拓く安曇野教育の実現」「行きたい、学びたい、地域から必要とされる魅力ある学校の創造」を目指してまいります。



【資料編】

安曇野市立小・中学校将来構想(案)の策定までの経過

(1) 安曇野市教育委員協議会の開催状況(開催日、主な協議内容等)

R1. 11. 28	第1回	児童生徒数の最新予測、国・県の考え方共有
R1. 12. 25	第2回	検討項目の整理、県内他市の事例研究
R2. 1. 29	第3回	市民意識調査の活用、明科北認定こども園の方針確認
R2. 2. 18	第4回	松本大学山崎保寿教授の講演会
R2. 3. 26	第5回	学校施設改修・長寿命化改良工事の確認
R2. 4. 23	第6回	安曇野市小中学校の学校沿革史の確認
R2. 5. 27	第7回	懇談会説明資料の検討、県外視察の検討
R2. 6. 29	第8回	懇談会説明資料の検討、懇談会の日程調整
R2. 7. 28	第9回	懇談会の報告、「構想イメージ図(案)」の検討
R2. 8. 25	第10回	懇談会の報告、構想案骨子案の検討
R2. 9. 24	第11回	将来構想(素案)の検討
R2. 10. 21	第12回	全体構想図の検討
R2. 11. 16	第13回	将来構想(案)の検討
R2. 12. 21	第14回	将来構想(案)の検討
R3. 1. 13	第15回	研究指定校明科地域3校長との意見交換

(2) 各種団体・組織と行った懇談会(開催日、懇談先、参加人数等)^{*}

R2. 7. 7	区長会正副会長会	安曇野市区長会正副会長5人
R2. 7. 9~8. 5	地域教育協議会	地域教育協議会委員のべ84人、17会場
R2. 7. 14	市校長会	小中学校長17人
R2. 7. 21	県教委	中信教育事務所長ほか2人
R2. 7. 27	社会教育委員	市社会教育委員12人
R2. 8. 3	県教組安曇野支部	執行委員長ほか役員8人
R2. 8. 19	市内4高校長	市内高校長4人
R2. 10. 6	退職校長会南安支会	会長、副会長、幹事7人
R2. 10. 12	公民館関係者	公民館長5人、社会教育指導員6人
R. 2. 10. 22	市教頭会	小中学校教頭17人
R. 2. 11. 13	市P連役員会	市P連役員9人
R. 2. 11. 18	市園長会	認定こども園・幼稚園園長19人

*教育委員協議会事務局が行った懇談を含む。

2 用語解説

※1 西田幾多郎碑

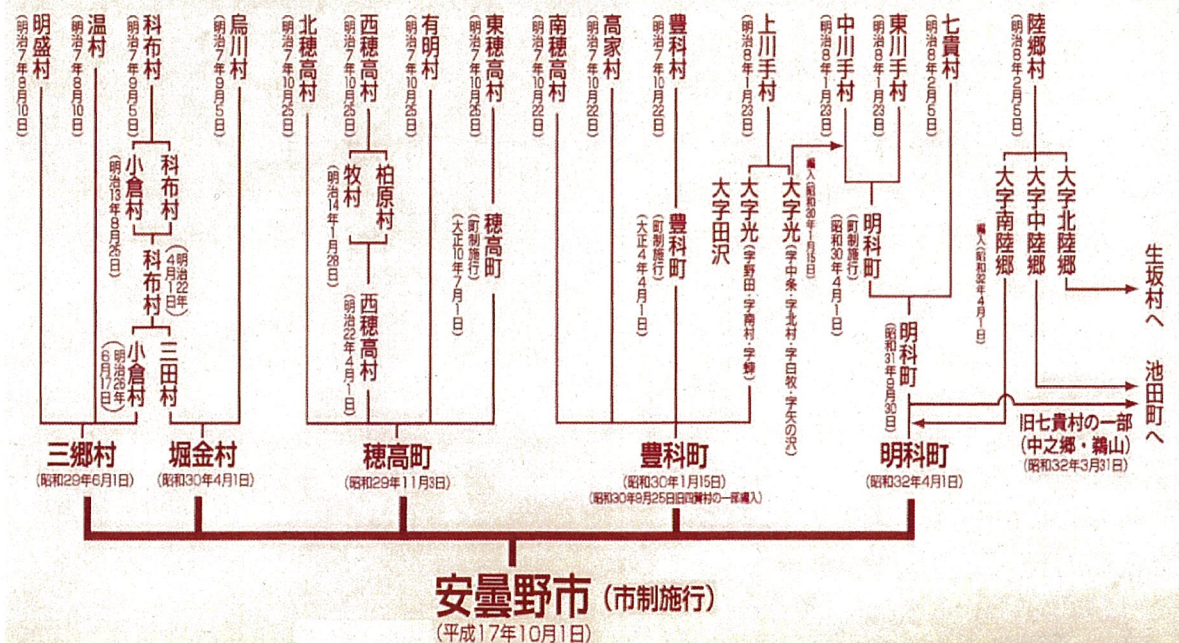
西田幾多郎詩碑は、豊科高家の信濃教育会生涯学習センターの北、旧高家小学校跡にある。日本紀元 2600 年を祝した記念事業の一環で、建碑は昭和 15 年、当時の藤沢利男校長が「教育尊重の村風」を踏まえ、西田の言葉と揮毫を高木幸村長に提案し、教育を思う村民の精神を、後世に伝えようと学校の玄関脇に碑の建立が実現した。

※2 南安曇教育文化会館

安曇野市本庁舎東側に、安曇野市の教師たちが自ら専門性を磨き合う研修活動の拠点としている南安曇教育文化会館がある。館内には、大正 13 年に、現職教員から初めて推挙された初代の南安曇教育会長 岡村千馬太先生の像や、後の総理大臣犬飼毅に揮毫を依頼し、座右の銘としていた掛け軸「知時務持大節則師道立矣」等、この地域ゆかりの先達が残した数々の遺品や、調査研究資料等が保管されている。

また、隣接する南側には、旧豊科中学校時代から引き継がれた「思索の庭」があり、教育哲学者木村素衛先生や三郷野沢出身の哲学者務台理作先生の詩碑が建立され、「教育の真なるもの、教師のあるべき姿を問い続け、求め続ける教師」の思いを新たにする場となっている。

※3 安曇野市の誕生まで—明治からの沿革小史



(安曇野市勢要覧 2020 より)

※4 総合教育会議とは

平成27年4月施行の改正地方教育行政法に基づき、教育政策について協議・調整するため設置された。市長と市教育委員会（教育長及び教育委員）で構成され、市長が招集する。

※5 コミュニティ・スクールが登場する背景

1990年代前半まで「学校教育は学校が担うべきもので、地域住民や保護者等は学校教育に介入しない」という考え方が根強く浸透していたが、1990年代後半になると、地域住民や保護者等が学校に参画する必要性が指摘されるようになった。

さらに、複雑・多様化した子どもや学校の抱える課題を地域ぐるみで解決する仕組みを構築し、質の高い学校教育の実現を図るためにコミュニティ・スクールを創出し、学校運営に広く保護者や地域住民がその当事者として参画し、地域の力を学校運営に生かす「地域とともにある学校づくり」を推進することとなる。（文部科学省HPから）

※6 小中一貫校、義務教育学校とは

義務教育学校は、平成28年の学校教育法の改正により誕生（学校教育法第1条の中で「幼稚園、小学校、中学校など」とともに教育施設として新たに規定されたことから「1条校」と呼ばれている）。9年間の義務教育を一貫して行う新しい日本の学校。小中一貫校の一種。従来の6-3制の枠組みにとらわれることなく、小中の学年の区切りを柔軟に変えたカリキュラム編成が可能になった。

現行の小・中学校との違い（例）：早期カリキュラムの導入、小学校段階からの教科担任制、児童会と生徒会・学校行事・校則の小中一体化、小中一貫の部活動などが可能となる。

○小中一貫校と義務教育学校の主な違い

小中一貫型小学校・中学校の校長はそれぞれに配置されるが、義務教育学校の校長は1人。義務教育学校の教員は、原則として小中学校両方の教員免許状が必要となる。

○長野県の義務教育学校は、令和3年4月現在、信濃小中学校（上水内郡信濃町）、美麻小中学校（大町市）、根羽学園（下伊那郡根羽村）の3校が設置されている。

○義務教育学校を視野においた小中一貫教育の例

9年間を通じた教育課程の創出（児童生徒の実態や地域の特性から）

※学年のまとまりを「4-3-2年」に見直した場合

- 1～4年生 学級担任制—基礎・基本の定着を図る学習
(読み・書き・計算の習得、自己主導の学びを重視)
- 5～7年生 教科担任制—個性・能力(適性)の伸長を図る学習
(学力の定着と個々の能力を引き出す習熟度別学習の充実、考える力や社会性を育む協同の学びを重視)
- 8～9年生 教科担任制—個性・能力(適性)の一層の伸長を図る学習
(自学自習、思考力・判断力・表現力を発揮した探究力、情報発信力を重視)

※7 「10歳の壁」とは

「10歳の壁」とは、小学校4年生前後の時期に子どもが直面しかねない、勉強面や内面的成長の変化を指す言葉。「9歳の壁」「小4の壁」とも呼ばれる。年齢に応じた子ども発達段階と深く関係しており、発達の個人差が顕著になり、身体も成長し、自己肯定感を持ち始める反面、自己に対する肯定的な意識を持たず、劣等感を持ちやすくなる時期でもある。また、抽象的な概念も理解するようになる時期とも言われる。実際に、算数の分数や割り算につまずいてしまうことがあるため、丁寧な指導が必要である。

※8 「中1ギャップ」とは

小学生が中学1年生に進級した際に、今までと全く違う学校生活や授業のやり方、学習内容、人間関係の変化などから、新しい環境になじめない現象のこと。不登校となったり、いじめが急増したりするなどの問題につながることもあると言われている。

※9 教育課程特例校制度の活用

教育課程特例校制度とは、文部科学大臣が、学校教育法に基づき指定する学校において、学校又は地域の実態に照らし、より効果的な教育を実施するための特別の教育課程を編成することを認める制度である。(文部科学省HP)

他地域の学校にはない特色ある魅力あふれる学校づくりを図る。

※10 小学校における「教科担任制」とは

小学校では、教科等の学習指導を、原則として学級担任と一部専科教員が担っているが、高学年において教科を選んで、学年内や学校内の教員による教科担当者を決め、授業交換等により教科指導を学級担任以外の教員が行うこと。小中一貫校では、小中の教員による授業交換も可能となる。

3 学級数について

(1) 学級の人数の基準〔令和3年4月現在〕

小中学校の学級の人数を国は40人（小学校1、2年生が35人）を標準と定める。長野県は全学級で35人、特別支援学級8人を基準としている。

※国の標準の考え方によると、学級編制の標準は40人を上限とすることから、下限は20人と算定できる。

※学級編制の標準については、「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」を参照

(2) 学級数減少に伴う「懸念される一般的な課題」

- ・社会性やコミュニケーション力を伸ばす場をつくりにくい。
- ・児童生徒の人間関係や相互の評価が固定しやすい。
- ・協働的な学びの設定が難しい。
- ・限られた数の教員の中で、多様な専門性に触れる機会が少なくなる。
- ・切磋琢磨して競い合って育つ場面をつくりにくい。
- ・教員への依存心が強まる可能性がある。
- ・進学等の際に大きな集団へすぐに適応できない可能性がある。
- ・同世代の多様な物の見方や考え方、表現の仕方に触れることが少ない。
- ・大勢の中で活動する機会が少なく、多面的な評価を受けることが難しい。

(3) 望ましい学級数の考え方

小学校では、まず複式学級解消のため少なくとも1学年1学級以上（6学級以上）であることが必要。また、全学年でクラス替えを可能としたり、学習活動の特質に応じて学級を超えた集団を編成したり、同学年に複数教員を配置したりするためには、1学年2学級以上（12学級以上）あることが望ましい。

中学校では、（略）少なくとも1学年2学級以上（6学級以上）が必要。また、免許外指導をなくしたり、すべての授業で教科担任による学習指導を行ったりするためには、少なくとも9学級以上を確保することが望ましい。

（文部科学省（H27）「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置に関する手引」）

安曇野市教育大綱

期間：平成 30 年 12 月 18 日～令和 5 年 3 月 31 日

〈平成 30 年 12 月 18 日開催 総合教育会議で決定〉

基本理念

子どもが健やかに育ち、生涯を通じて学び合い、文化を創り育むまちを築きます。

基本方針

- 1 “からだを動かし、頭で考え、心に感ずる”「たくましい安曇野の子ども」を乳幼児期から学齢期のそれぞれの発達に応じて、連携して育みます。
- 2 豊かな人間性の基礎と社会性を育む家庭教育を充実し、学校・家庭・地域が協働して子どもたちを育みます。
- 3 安曇野の自然や人の中で、豊かな体験や交流を通して人間形成を図る保育・教育に取り組みます。
- 4 生涯の各段階に応じた学習機会を充実させ、生きがいをもって地域社会で活躍できる生涯学習社会の構築を図ります。
- 5 スポーツ活動の充実を図り、だれもが健康で笑顔あふれ、活力みなぎるまちを目指します。
- 6 先人が培ってきた歴史や文化を基にした文化芸術の振興を図り、“文化のかおり高いまち”をつくります。
- 7 市民の多様化する「学び」の要望に応え、本や情報と人とが出会い交流する広場を創出し、知と心が満たされる社会の実現を目指します。



からだを動かし、頭で考え、心に感ずる *
“たくましい安曇野の子ども”

未来を担う
 安曇野市の宝

*文芸評論家・作家 臼井吉見（1905-1987 安曇野市）の講演「中学生諸君に望む」（1967）から

＜教育理念＞ 子どもが健やかに育ち、生涯を通じて学び合い、文化を創り育むまちを築きます 安曇野市教育大綱（H30.12.18 総合教育会議で決定）

— 願う 児童生徒、教師、学校の姿 —

自ら動く児童生徒

- ・自ら判断し行動する児童生徒
- ・自信をもって自己を表出する児童生徒

学び続ける教師

- ・豊かな発想でのびのびと自らを高める教師
- ・明るく元気に、笑顔で子どもの前に立つ教師

地域へ飛び出す—地域との連携を強める学校

- ・地域の“ひと・もの・こと”と積極的なかわりを持ち、特色ある豊かな学習を展開する学校

市内全校で取り組む内容

- (1) 電子黒板や一人1台端末を活用した授業づくり ICT 機器を活用した主体的に学ぶ学習の展開
- (2) 健康増進、体を動かす機会の創出 「手作りお弁当の日」の実施、自力登下校の促進
- (3) 郷土への愛着や誇りの醸成 地域学習の充実、安曇野市歌・あつみの健康体操の普及
- (4) 共生社会への基盤づくり 副学籍の活用と交流及び共同学習の推進
- (5) 連携と交流 幼保小中高の連携強化、民間施設との関係強化、ボランティア会の立ち上げ
- (6) 健全育成 「情報機器の運用規定やルールづくり」と心身の健康被害防止啓発
- (7) 命・人権の尊重 新型コロナウイルス感染症対策と人権教育の推進、交通事故0701の強化

市研究指定校

- (1) 「明科中学校区における小中一貫教育」（2年次）…明北小・明南小・明科中
- (2) 「ICT 機器を積極的に活用した授業づくり」（新規）…豊科北小・穂高北小・穂高東中
- (3) 「国型コミュニティ・スクール移行に向けた体制づくり」（新規）…堀金小・堀金中

“たくましい安曇野の子ども” を目指す安曇野市立小中学校の将来構想（案）

- 重点① コミュニティスクールの活性化 ② 小中一貫教育の導入 ③ 「安曇野の時間(仮称)」の創設

※令和3年度内に策定予定

家庭・地域

幼稚園・認定こども園など

県教育委員会・中信教育事務所

校長会・教頭会・教育会・退職校長会・県立特別支援学校・市内県立四高校長会・市PTA連合会、教育関係七団体等

ACS 地域教育協議会・学校応援隊

安曇野市・安曇野市教育委員会（学校教育課・文化課・生涯学習課）

教育委員協議会名簿

教育長	橋渡 勝也
教育委員（教育長職務代理者）	唐木 博夫 R3.11.8まで
教育委員（教育長職務代理者 R3.11.9～）	須澤 真広
教育委員	横内理恵子
教育委員	二村美智子
教育委員	羽田野賢二 R3.11.9～
事務局	
教育部長	平林 洋一
学校教育課長	沖 雅彦



安曇野市 教育・学校の将来構想

「未来を拓くたくましい安曇野の子ども」を目指す
安曇野市立小・中学校の将来構想(案) (基本方針の概要)

- ・ 郷土への愛着と誇りを持ち、志を高く未来を切り拓く安曇野教育の実現
- ・ 行きたい、学びたい、地域から必要とされる魅力ある学校の創造

学校運営協議会と地域学校協働活動による
安曇野市コミュニティスクールの構築

小中一貫教育の導入

ふるさと安曇野市を体験的・探究的に学ぶ
「安曇野の時間」(仮称)の創設



重点3項目

行動目標の視点

将来構想を踏まえた行動計画策定に向けて

R3. 12. 22 安曇野市教育委員会

重点1 学校運営協議会と地域学校協働活動による安曇野市コミュニティスクールの構築

視点① 地域と学校の連携・協働体制づくり

視点② 地域の職業人から学ぶキャリア教育

重点2 小中一貫教育の導入

視点③ 切れ目のない成長と自立の支援

視点④ 成長の土台づくりと体力向上

視点⑤ 小中一貫型小学校・中学校、義務教育学校

重点3 ふるさと安曇野市を体験的・探究的に学ぶ「安曇野の時間」(仮称)の創設

視点⑥ 安曇野を学ぶ時間の整理から「安曇野の時間」(仮称)へ

視点⑦ 副読本「安曇野学の手引き」(仮称)

視点⑧ 安曇野らしい食・農体験

視点① 地域と学校の連携・協働体制づくり

目標 学校運営協議会の立ち上げと地域学校協働活動業務の地区公民館への追加

現状と方向性

- ・現在の安曇野市コミュニティスクールでは、地域教育協議会を設け、学校運営の理解・参画、学校支援、学校評価について年2回の協議会を開催しているが、活性化が大きな課題である。
- ・また、地域と学校の関係は、学校からの支援要請に基づいて地域コーディネーターが人材を探して、学校応援隊ボランティアが支援するという「個別の活動」による「地域から学校への支援」になっており、双方向的な活動の活発化が課題である。
- ・国が推奨している「学校運営協議会」は、学校運営への地域住民の参画による学校づくりの制度で、「地域学校協働活動」は、学校支援の充実、地域住民の学習機会の拡大等を目的とした地域づくりの活動であり、今後の安曇野市が目指したい方向と一致するところが多い。
- ・地域学校協働活動は、地域・学校・家庭の連携推進母体として、社会教育と生涯学習の拠点である公民館（生涯学習課）が役割を担っていくことが、今後、重要になっていく。
- ・一方、各学校には地域コーディネーターが1～3名いるが、地域学校協働活動の充実を図るためには、これを統括する人材が必要である。
- ・新学習指導要領の目標「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」を学校と地域が共有し、学校と地域が相互の連携・協働のもとに学校づくりと地域づくりを進め、子どもの成長を支える必要がある。
- ・本年度中に、中学校区ごとに地域学校協働本部連絡会準備会を立ち上げ体制を整える。

アプローチ

- ・学校運営協議会の委員については、各小中学校長の推薦に基づいて委嘱するよう準備を進めている。
- ・「地域協働活動に関する業務」については、地域公民館の所掌事務に加え、地域統括コーディネーターの役割を新たに置き、公民館長と社会教育指導員が連携して地域学校協働本部連絡会の運営など学校・地域・家庭の協働活動の推進業務を担う。
- ・地域統括コーディネーターは、学校単位の地域コーディネーターへ地域住民等のネットワークづくりの支援や、地域社会資源の新たな掘り起こしなどを担う。
- ・中学校区単位に、地域学校協働本部連絡会を置き、学校長、地域コーディネーター、民生児童委員、こども園、社協などが参加し、定期的に地域の教育に関わる情報交換・情報共有・人材の紹介などを行う。
- ・現行の公民館業務のなかでスリム化等できる業務の見直しをして、社会教育による地域づくり機能を強化する。

期待できる効果

- ・学校運営協議会と地域公民館を協働の拠点とする地域学校協働活動の実現を図ることにより、安曇野市コミュニティスクールの一層の充実と活性化が期待できる。

<p>視点② 地域の職業人から学ぶキャリア教育</p>
<p>目標 安曇野市の産業等について学ぶ機会の創出とキャリア教育の充実</p>
<p>現状と方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安曇野市には優良企業が多数あるので、その存在を子どもたちが知る機会とするために、平成30年度、小学生を対象に「夏休み小学生企業見学」を行った。多くの希望者がいたが参加人数を制限せざるを得ず、学習者は限られてしまった。参加者や保護者には大変好評だった。 ・中学2年生全員を対象に「市政講座」を行い、中学生議会につなげた。代表者は提言のとりまとめに関わり、市政への関心を高めることができた。しかし、学習者は限られている。 ・そこで、市内の全生徒が参加でき、企業や行政等で働く大人と交流し対話できるような場がつかれないか考えた。 ・また本市には、現在も第一線で活躍している芸術家や工芸家が多数いる。子どもたちがそうした方とも出会い、職業人としての熱い思いを知る機会を創設したいと考えた。
<p>アプローチ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安曇野市の中学生が「地域を知り」「地域の人とふれあい」「地域の未来を考える」おまつりの要素を含んだイベント「安曇野市中学生キャリアフェス」(仮称)を開催する。 ・地域の大人から仕事のことや自分自身のことを聞く機会をつくり、いろいろな人と接する場面を設ける。その際、企業等の仕事紹介にならないように留意する。 ・産業界や行政等とタイアップしながら、中学生が大人とともに企画立案から運営まで行うような実行委員会形式が取れるとよいと考える。 ・初年度、中学校1校を研究指定校として実践し、やがては市内7中学校の同一学年の生徒全員が参加する取組を目指す。 ・現在まで、中学校で行ってきた職場体験学習のよさや成果もあるが、体験内容には限界があり、受け入れ企業等の確保に苦勞している面もあることから、見直す機会ともしたい。
<p>期待できる効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生が、様々な大人と出会うことで「こんな大人になりたい」という将来に向けての夢を持つことができる。 ・大人も、中学生に自分の仕事の魅力や仕事にかける気持ち等を話すことで、自分自身の振り返りにつながる。また、市内の大人同士のつながりを生み出す可能性もある。 ・中学生が、大人と出会い対話することで、安曇野市の良さを実感したり、市の現状を深く見つめなおし市の将来を真剣に考えることにつながり、郷土愛を育む場になることが期待できる。 ・各学校での職場体験学習や、市が行ってきた「夏休み小学校企業見学」「中学生議会」の発展充実(統合)につながる。 <p>(備考) 伊那市中学生キャリアフェスの視察(R3.11.11)を参考にした。</p>

視点③ 切れ目のない成長と自立の支援

目標 支援を要する児童生徒や家庭に対する切れ目のない支援の体制づくり

現状と方向性

学校教育課では、管内小・中学校に対して、毎月「出欠席の状況から配慮を要する児童生徒」の提出を求め、長期欠席や学校での配慮を要する児童生徒数を把握している。この件数は年々増加しており、不登校児童生徒数も昨年度よりも増加の傾向が続いている。

また、支援を要する児童生徒への対応策として、毎週水曜日の朝、学校教育課では福祉課や子ども支援課、安曇養護学校、スクールソーシャルワーカー等と短時間での情報共有交換を行う「教育・福祉担当者会議」を開催している。これにより、教育と福祉との連携は当市の強みである一方で、未就園児や義務教育卒業後の子どもに対する情報共有や連携、支援が十分ではない状況がある。

そこで、子ども及び家庭に対する支援は、早期発見・早期支援・切れ目のない伴走的な支援体制が必要である。

アプローチ

1、プロジェクトチームの立ち上げ

健康推進課（産前産後、未就園児）、子ども支援課（就園児、要保護児童対策）、福祉課（障がい児、引きこもり、生活困窮者家庭）、家庭児童相談室、学校教育課（義務教育の児童生徒）等により横断的支援体制を構築する。

2、プロジェクトチームによる定例会議の開催

月1回程度、定期的に支援を要する子どもや家庭等の情報共有を実施する。特に、移行時（就学や進学等）での申し送りを強化し、切れ目のない支援と共に寄り添う伴走型支援の充実を図る。

3、横断的チームアプローチの実施

個別支援に伴う、関係者会議や支援会議には横断的な支援ができるようチームで参加、支援方針を決定する。また、必要な支援が生じた場合は、部局を超えた横断的な支援を実施する。

例) 保健師による児童生徒への支援、福祉課による中学生への卒業後のつなぎ支援等

4、個人情報の取り扱いに関する検討

現在の市の体制を見直し、部を越えた個人情報の扱いを柔軟にし、就学前からの基礎データや支援の履歴が、そのまま引き継げるようにするための検討を行う。

期待できる効果

発達に心配のある子どもや支援を要する児童生徒、義務教育後の引きこもりになっている子どもは年々増加している状況である。乳幼児期から成人するまでの発達段階に応じた情報を共有できる体制を構築することで、予防的な係わりから早期支援、個別支援から家庭支援等、個々の課題や家庭環境に適した支援を行うことができる。

また、支援を要する子どもや保護者に対して、早い段階から支援者が係わり、必要な情報を提供し、次の発達段階での主たる支援者となつなげることで、保護者は見通しを持ち、選択肢の中から受けたい支援を自己決定し、支援者が寄り添う伴走的支援体制で安心感を抱くことができる。

これらのことから、孤立や孤独を感じない支援体制、選択できる自発的支援の実施、経済困窮等による世代間連鎖の解消といった効果が期待できる。

<p>視点④ 成長の土台づくりと体力向上</p>
<p>目標 体幹づくりや体力向上のための体幹トレーニングと自力登下校推奨、中学校部活動での朝の自主練習、中学校集団登山復活の取り組み</p>
<p>現状と方向性</p> <p>安曇野市の小中学生は、県内において体力テストでは低い成績の種目が多い。また、体育の授業や部活動以外で体を動かす時間は、自然豊かな地域であるにもかかわらず、残念なことに県内で最下位を示す（令和元年度実績）。</p> <p>中学校では体力低下の現象として、運動部活動を敬遠する生徒の増加、標高が高い集団登山には体力面で参加を諦める生徒が多数いるため目的地の変更などに現れている。更に、防犯安全面を考慮したとしても、小中学生が親の送迎による登下校があまりにも多くなってきている。また、部活動のあり方については、教員の働き方改革を受け、見直しが進んでいる。</p>
<p>アプローチ</p> <p>まず、現代のトレーニングの主流をなす「コオディネーショントレーニング」のトレーナーの資格を持つ専門性のある指導者が、日常の授業現場に向く支援体制をつくりたい。安曇野市では、すでに認定こども園で、安曇野自然保育とともに実施してきており、ある程度定着してきている。今後、小学校で実施されれば、教員にとっても学年の発達段階に応じた運動経験や体づくりについて学ぶことができ、教師の教育力向上に大きく役立つ。体力向上のためには、自発的・自主的に体を動かそうという子どもの意志が土台となる。学校の授業で、動く楽しさや動きの仕方を正しく学ぶことにより、自立登下校の意欲にもつながる。</p> <p>また、中学校の部活動においては、朝部活は廃止したが、希望する者が地域の方の見守りの中、朝の自主練習を行うことができる仕組みを整えている。この安曇野独自の取り組みが、より効果を上げるよう、更に見直しを図る。</p> <p>中学校の集団登山については、毎日仰ぎ見て安曇野のシンボリックな山への集団登山について具体的な方法を市内の中学校に提案し、実現に向けた検討を行ってもらう。</p>
<p>期待できる効果</p> <p>体幹トレーニング指導員が学校現場へ巡回指導することによって、小学校の体育授業の導入や主運動へつなげる基礎的・基本的な動きを、教師が自信を持って児童へ示すことができる。それが「楽しい体育」に直結し、児童が体を動かすことへの抵抗感をなくし、自発的・自主的に体を動かす習慣づくりのきっかけとなる。この取組を継続することが、中学生になっても体づくりや運動に向かう姿勢、健康への意識を高めることの基本となっていくと考える。子どもの取組の変容は、家庭の変容につながる。できるだけ動こうとする児童が増え、自力登下校の大切さや必要感を改めて見直す機会となる。</p> <p>中学校における運動部活動や、学校登山への敬遠者も減少する可能性があると考えられる。校歌に歌われる常念岳や燕岳へ登ったということが一生の宝となり、人生に彩りを与えるとともに、ふるさと安曇野を愛する心を培うことになる。</p>

<p>視点⑤ 小中一貫型小学校・中学校、義務教育学校</p>
<p>目標 「明科中学校区における小中一貫教育」の実践をふまえ、活力ある新たな学校づくりに向けて、学校、地域とともに研究を進めていく。</p>
<p>現状と方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ○明科地区3校（明北小、明南小、明科中）を、市の研究指定校「明科中学校区における小中一貫教育」に指定し2年目となる。定期的に3校の校長会を開き、時には明科高校の校長も交えながら研究を進めてきた。 ○2年目の主な取組は、次のとおりである。 <ul style="list-style-type: none"> ・明科3校の願う子どもの姿「明るく豊かにいきる子ども」(案)を決め出した。 ・教職員間の交流及び研修会を実施した(年3回)。そのうちの1回は、臨地講習を行った。また、教科別部会を開き、小中間で各教科の年間指導計画を見合い9年間のカリキュラム編成に着手し始めた。 ・その他として、小中間での授業交流、小小間での交流活動、3校の校長による先進地視察(上諏訪小・上諏訪中)など ○今後、さらに教育課程の編成(各教科・領域、様々な教育活動)について議論していく予定。
<p>アプローチ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○明科地区の願う子どもの姿を、地域と共有する場を設けて、今後の方向性を含め議論する。 ○願う子どもの姿をもとに、小中一貫した教育課程を編成する。 <ul style="list-style-type: none"> ・柱となる特色ある教育活動を策定する。(例)明南小で始めたダンス、英語等 ・各教科のカリキュラムを、9年間を見越して整理し指導の柱を決める。 ・現在行っている「明科を学ぶ学習」を整理し、「明科学」(仮称)として体系化していく。 ○小中間での乗り入れ授業の実施、中学校への体験入学の日数を増やす。 ○人と人をつなげる活動を行う。(例)職員間交流、児童間・児童生徒間交流 ○小小間での連携 (例)合同行事の実施、オンラインを活用した日常的な児童間交流等 ○体制の整備(市教委) <ul style="list-style-type: none"> ・小中一貫型小学校・中学校と義務教育学校の違いを整理する。また、必要な手続きを研究する。
<p>期待できる効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習規律や学習習慣等の定着が図られ、継続的で段階的な学びが実現できる。 ・中1ギャップが解消され、中学進学に対する不安感が減少する。 ・異年齢交流の機会が作りやすく、子どもたちに思いやりや社会性、自尊感情の醸成が期待できる。 ・教職員にとって、義務教育修了時の子どもの姿に責任を持つ意識が芽生え、子ども理解が進んだり、相互に協力し合うことで小中共通の取組が増加したりする。 ・教育課程特例校制度等を活用しながら、特色ある、魅力ある学校にしていくことが期待できる。

視点⑥ 安曇野を学ぶ時間の整理から「安曇野の時間」(仮称)へ

目標 各学年の学習内容や学習活動を安曇野市の自然・文化・歴史・産業などの観点で整理し、小中一貫教育の視点で検討を加えて、体系化した「安曇野の時間(仮称)」構想案を作成する。

現状と方向性

安曇野市立小中学校では、安曇野市について、地域に出かけたり、地域の方を招いたりして、折に触れて体験的・探究的に学んでおり、各学校の特色ある教育になっている。

そこで、小中学校ごとに現在行っている安曇野に関する学習を洗い出し、整理し、次に小中一貫教育の視点で、同一中学校区内の小中学校で共有して、同一地域で教育を受ける児童生徒にとって、いつ頃、何を学ぶことが良いのかを検討し、「安曇野の時間(仮称)」構想案を作成する。

アプローチ

国の教育課程特例校制度により、教育課程の中に教科等の1つとして「安曇野の時間」(仮称)を設けることも可能であるが、まずは、それを目指すのではなく、今ある安曇野についての学習のつながり、連続性、系統性を明らかにして、安曇野について学ぶ内容を「安曇野の時間」(仮称)と設定し、それぞれの質を高めた実践につなげていく。

例えば、堀金小学校で行っている拾ヶ堰についての学習は、拾ヶ堰開削の歴史、堰の水を使った米づくり、土地利用と農作物など、主に社会科で行われ、堀金中学校では、道徳科や社会科公民の教材ともなっている。

このような堀金小学校・中学校で行われている拾ヶ堰についての学習を、小中一貫教育の視点で整理し、何年生でどんなことを学ぶことにより、次の学習へつなげていけるか、最終的に堀金地域で育つ子どもたちにどんな力をつけたいかを検討するという研究に着手したい。

(補足)

案1:「安曇野の時間ノート」をつくり、学習内容や感想メモを9年間記録させ、中3卒業時には、ふるさとについての学びの証として認定証を交付するなど努力を讃える。

案2:「安曇野の時間発表会」を校内や市全体で行い、各学校の取り組みを学び合う機会とする。

期待できる効果

安曇野市に対する、より深い理解に基づき、故郷に対する愛着や誇り、自信につなげ、生涯、安曇野への思いを持ち続ける郷土愛が育まれるものと思われる。また、学習で9年間活用した副読本「安曇野学の手引き(仮称)」一子ども版「安曇野の宝」は、一生の宝になる。

視点⑦ 副読本「安曇野学の手引き」(仮称)

目標 宝シリーズの集大成として子ども版「安曇野の宝」の刊行と「安曇野の時間」(仮称)での副読本としての活用

現状と方向性

豊科郷土博物館が中心となって作成している宝シリーズは、安曇野市各地域の自然や歴史、民俗、名所等を幅広く紹介する書籍として、これまでに「明科の宝」「穂高の宝」を刊行し、本年度は「豊科の宝」の作成を進めているところである。

一方で、進学等で安曇野市を離れた若者に、郷土への思いを持ち続ける郷土愛を育む教育が求められている。そのことが、将来の人口減対策につながる可能性も大きい。

そこで小中学校の各学年で実施している地域学習の時間を改めて整理して「安曇野の時間」を創設することで、小中で一貫した学習内容の連携等を深めていく方針が検討されている。

このための教材としては安曇野検定のテキストとして用意された「安曇野の郷科書」があるが、これは内容が細かく大人向けであり、さらに在庫が既に無く再販の予定も無いことから、子どもたちが安曇野について学ぶ上では新たな教材となる副読本が必要である。

アプローチ

宝シリーズの刊行を全地域分済ませた後、これを統合し1冊にまとめた子ども版「安曇野の宝」を刊行する。内容は子ども向けに文章を平易にして写真をより多く取り入れたものとし、安曇野市に関する“初心者向け”のものとする。読み物というよりは資料集のイメージでまとめる。

これを「安曇野の時間」の副読本として活用することにより、児童生徒が調べ学習をするための一助とする。

このために、今後予定されている「三郷の宝」「堀金の宝」の刊行と並行し、各学校で実際どのような地域学習を実施しているか、またそれぞれに求められている教材の内容等をリサーチし、宝シリーズの編集にも一部反映しながら最終的な「安曇野の宝」の作成につなげていく。

期待できる効果

作成した「安曇野学の手引き(仮称)」—子ども版「安曇野の宝」を活用し、「安曇野市の魅力や文化などの全体像を体系的に把握する」ための学習に役立てる。

また、さらに学びを深めたい児童生徒には、図書館、博物館、文書館、美術館等の専門職員からアドバイスや指導・助言が得られるようにすることで、よりレベルの高い探究的態度を育むことができ、高等学校での探究的な学びにつなげることが期待できる。

視点⑧ 安曇野らしい食・農体験

目標 「手づくり弁当の日」の充実発展を目指し、安曇野産農作物への興味・関心を高める。併せて、学校給食での生産者との交流を児童生徒主体に行い、さらに、農業体験及び生産者との交流を全小中学校に広げる。また、みどりの少年団活動を支援し活性化を図る。

現状と方向性

安曇野市のよさは、緑豊かな水田や山林の景観であり、そこで育てられた米をはじめとした農産物や木材によって、安曇野市民の命や生活が支えられている。

本年度から「手づくり弁当の日」を市内の全17小中学校に広げた。目的は「子どもの自立への支援」、「生きる力の育成」、「家族の絆を強める」ことである。この取組への指導で「農産物を生産する農家の方がどんな気持ちで、何を目的としているのか」等のことを児童・生徒に考えさせることができる。それは「食農教育」であり「心の教育」でもあり、地元の農業に対する学習へとつながる。

また、各小中学校では、生徒会や児童会が中心となって、農業生産者との交流給食を行ったり(小5校、中3校)、農家と農作物作りの交流体験を行ったりしている(小8校、中3校)。これは、「顔の見える給食」として、また共に体験することを通して、子ども達が、農業生産者の生の声を聴くことができ、農業や農家の暮らし、ひいては安曇野を知ることにつながる。

みどりの少年団については、現在、登録している学校も、教職員の負担が大きい、活動時間の確保が難しいなどのことから活動が縮小、休止、廃止へと流れる傾向が出てきている。

<令和3年度 みどりの少年団登録の状況>

豊科南小、穂高北小、穂高南小、穂高西小、穂高西小、穂高西中、堀金中、堀金小(休止中)、明北小(休止中)

そこで、こうした状況に対して、活性化を図る支援が必要になっている。

アプローチ

「手づくり弁当の日」の定着を図るとともに、農林部農政課との連携により、児童生徒一人ひとりに、例えば、玉ねぎ1個やセロリ1束を配布し、これを食材とした「手づくり弁当の日」に取り組んでもらう。このことによって、地産地消の意味や目的を知る学習につなげる。また、市からの呼びかけによって、多くの農業生産者の参加による交流生産体験や交流給食を全小中学校で実施し、収穫祭や地域伝統食祭りなどの学校行事にも参加してもらい、子ども達が「安曇野で学べてよかった」と思う原体験をさせたい。

みどりの少年団については、活動内容を、耕地林務課が関係機関と調整し、発達段階に応じた原案を作成して学校に提案するという形式をとったかどうか。また、学有林作業等の当日の活動の指導は、森林組合の専門家や地域学校協働活動としての地域ボランティア等が行うこととし、学校職員は主に安全指導を行う。また、交流会等対外的な活動の引率についても、地域学校協働活動ともあわせて支援を検討する。

期待できる効果

地元の名産などの農作物への関心が高まり、安曇野という地域の特徴を学ぶ学習へとつながる。また、保護者も地元の農業に関心を持って、地産地消の意識が高まる。そして、教育委員会だけではなく市全体が応援してくれる「手づくり弁当の日」として大きなPRとなる。

これは、市として子どもの食農教育に力を注ぎながら農業振興を図り、後継者育成に力を注いでいることを住民に知らせることにつながると考える。

みどりの少年団活動へ支援することで、学校側の負担感が減り、活動が活性化し自然の中での体験活動が増える。児童生徒の緑化運動や里山保全などへの関心が高まり、安曇野の豊かな自然を維持しようとする心情が養われる。

令和4年度 新スタート

安曇野市コミュニティスクール (ACS)*

安曇野市教育委員会

地域住民の参画による“学校づくり”

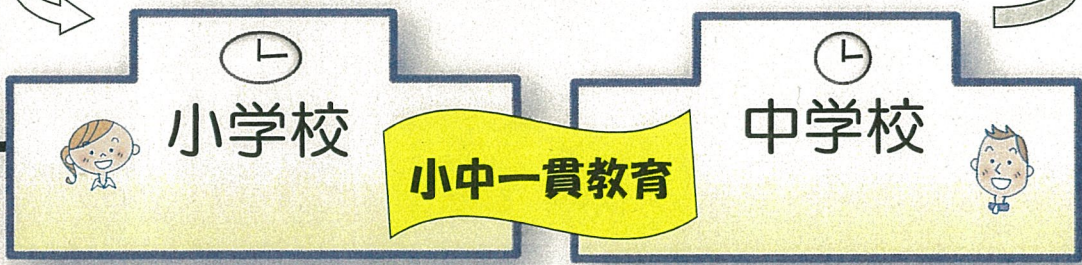
学校運営協議会

- ①学校運営の基本方針を承認する
- ②学校運営について意見を述べることができる
- ③教職員の任用について意見を述べるができる

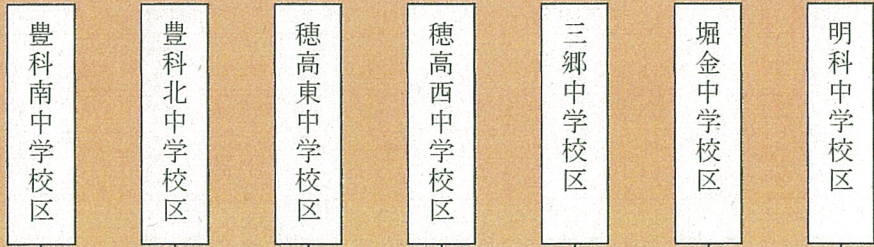


※地域コーディネーターは各小中学校に1名以上配置しています。

たくましい安曇野の子ども



・社会で生き抜く力 ・ふるさとへの愛着と誇り ・学ぶ楽しさ



地域学校協働活動本部連絡会

統括地域コーディネーター(地域公民館)

地域と学校の協働活動による“地域づくり”

地域学校協働活動推進員 通称「地域コーディネーター」

安曇野市教育委員会 学校教育課・生涯学習課

[歩み] H21～安曇野市学校支援地域本部、H26～安曇野市スクールサポート、H29～ACS、R4～新ACS

*「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」(第47条の5)に規定する学校運営協議会による国型コミュニティスクール